

# 中原遺跡

発掘調査報告書

1984

掛川市教育委員会







# 中原遺跡

発掘調査報告書

1984

掛川市教育委員会



## 序

現代社会に生きる私たちは、遠い祖先がどのような生活をしていたかをくわしく知ることはできません。

しかし、これまで実施された、いろいろな発掘調査や研究から、原始時代の人々がいかに偉大な文化を創造してきたかを知ることができるようになってまいりました。

往古の人たちも、水の利のよい丘陵地帯に住むために適地を求め、そこに集落を形づくり、一つの社会集団を形成していたことがうかがえます。

それらの中で、掛川市の西端地域にある原野谷川流域は、市内を流れる他の河川流域にくらべ、遺跡の規模が大きいことで知られており、原始時代の人々の集落の適地でありました。

このように、遺跡を包蔵する土地は、掛川市においても種々の開発事業や圃場整備事業の進展とともに、土地の利用や改変によって多くの埋蔵文化財が発見されることが年々増加してきている状況にあります。

このたび、吉岡地区において老化した茶樹の改植にともなって、事前に発掘調査を行なうことになりました。調査の結果、遠州地方においての縄文時代中期中葉の集落のようすが明らかとなる住居跡が発掘されたことは大きな成果であります。

さらに、発掘調査に際して多大な御協力をいただいた土地所有者をはじめ、関係各位に対し、心から感謝申しあげるとともに、本書が郷土の歴史や文化の研究に役だてば誠に幸甚であります。

昭和59年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 伊藤 昌明

## 例　　言

1. 本書は、昭和58年11月1日から昭和59年3月31日まで実施した静岡県掛川市高田字中原1016～1017に所在する中原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、中原遺跡地内での茶園改植に伴う緊急発掘調査として国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、掛川市教育委員会の岩井克充・長尾秀雄・松本一男が担当し、菊川町在住の篠原修二君の応援を得て行った。
4. 発掘調査および資料整理では次の方々の参加・協力を得た。記して感謝の意を表したい。

鈴木茂義・鈴木昭男・弓桁正己・大場朝子・大場せつ・小沢ろく・上村静子・鈴木辰江・  
鈴木千代乃・鈴木はや子・鈴木弘子・長谷川幸子・宮崎ひさ子・尾崎洋美
5. 調査にあたって次の方々から協力・教示を得た。記して感謝の意を表したい。

加藤賢二・瀬川裕市郎・平野吾郎・前田庄一・松井一明・向坂鋼二・吉岡伸夫  
特に加藤賢二氏には出土土器整理に至るまで多大な協力を得ている。
6. 本書の編集・執筆は全て松本が行った。
7. 遺物の実測は篠原・松本が、トレースについては松本が行った。
8. 本調査および本書刊行に関する事務は、掛川市教育委員会社会教育課（課長増田徹禪、文化係長岩井克充、主事長尾秀雄・永田律子・松本一男）があたった。
9. 調査資料は全て、掛川市教育委員会が保管している。

## 凡 例

- ・挿図における方位は磁方位を示す（1983・11）。
- ・S B・S Xの実測図は $\frac{1}{40}$ 、S F・S Pの実測図は $\frac{1}{20}$ 、S Dの実測図は $\frac{1}{60}$ で示した。
- ・掲載土器・石器はそれぞれ通し番号で示した。
- ・土器拓影図は $\frac{1}{3}$ 、石器実測図は $\frac{1}{1} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3}$ 、土製品拓影図は $\frac{1}{4}$ で示した。

# 目次

序	
例 言	
凡 例	
<b>I 発掘調査と遺跡の概要</b>	<b>2</b>
1. 調査に至る経過と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡の地理的・歴史的環境	4
<b>II 調査の内容</b>	<b>7</b>
1. 遺 構	7
i 縄文時代の遺構	9
ii 縄文時代以降の遺構	18
2. 遺 物	21
i 土 器	21
ii 石器とその他の遺物	29
<b>III 成果と問題点</b>	<b>34</b>
1. 遺跡の動態	34
2. 遺構について	36
3. 出土土器について	38

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	1
第2図	グリッド配置図	3
第3図	周辺地形図	6
第4図	遺構全体図	8
第5図	S B 01 平面実測図(上)・掘り方平面実測図(下)	10
第6図	S B 01 炉実測図	11
第7図	S B 01 遺物出土状況	11
第8図	S F 01・02 実測図	13
第9図	S F 03・04 実測図	14
第10図	S F 05・06 実測図	15
第11図	S F 07 実測図	16
第12図	S P 04・05・06 実測図	17
第13図	S X 01・07 実測図	19
第14図	S D 01 実測図	20
第15図	S B 01 出土土器拓影図	24
第16図	S F・S P・S X出土土器拓影図	25
第17図	出土土器拓影図(1)	26
第18図	出土土器拓影図(2)	27
第19図	出土土器拓影図(3)	28
第20図	出土土器拓影図(4)	29
第21図	出土石器実測図(1)	30
第22図	出土石器実測図(2)	31
第23図	出土石器実測図(3)	32
第24図	出土土製品拓影図	33
第25図	出土土器分布図	35
第26図	S B 01 Pit 配置図	37

## 挿 表 目 次

第1表	S B 01 Pit 計測表	37
-----	----------------	----

## 図 版 目 次

- 図版 I 上 中原遺跡遠景（航空写真）  
下 中原遺跡近景（調査前）
- 図版 II 上 調査区完掘状況（東から）  
下 調査区完掘状況（西から）
- 図版 III 上 S B 01 遺物出土状況（北から）  
下 S B 01 完掘状況（西から）
- 図版 IV 上 S B 01 炉跡（西から）  
中 S F 01 完掘状況（北から）  
下 S F 02 完掘状況（西から）
- 図版 V 上 S F 03・04 遺物出土状況（北から）  
中 S F 05 完掘状況（東から）  
下 S F 06 完掘状況（北から）
- 図版 VI 上 S F 07 完掘状況（東から）  
中 S P 04 遺物出土状況（東から）  
下 S P 05・06 完掘状況（東から）
- 図版 VII 上 S X 01 完掘状況（北から）  
中 S X 07 完掘状況（東から）  
下 S D 01 完掘状況（南から）
- 図版 VIII 上 S B 01 出土土器（1～25）  
下 遺構出土土器（26～40）
- 図版 IX 上 遺構出土土器（26～40）  
遺構外出土土器（41～65）
- 図版 X 遺構外出土土器（66～99）
- 図版 XI 遺構外出土土器（100～148）
- 図版 XII 遺構外出土土器（149～190）
- 図版 XIII 上 出土石器（石鏃・土製円盤・石錐）  
中 出土石器（石匙・石鍬・磨斧）  
下 出土石器（打斧・磨石・石皿）



1. 中原・溝ノ口・東座  
 2. 横峰 II  
 3. 堀越 I  
 4. 安忍山  
 5. 長福寺西  
 6. 吉岡下段  
 7. 吉岡原  
 8. 濑戸山 II  
 9. 濑戸山 I  
 10. 女高  
 11. 向津原 III  
 12. 向津原 II  
 13. 向津原 I

0 100m

第1図 周辺遺跡分布図

# I 発掘調査と遺跡の概要

## 1. 調査に至る経過と調査の目的

吉岡原をはじめ和田岡原に縄文時代の遺跡が多数存在することが広く知られるようになったのはそういう古いことではない。かつて掛川西高校郷土研究部が刊行した『ふるさと』<sup>(1)</sup>誌上に紹介した遺跡分布の他、昭和54年に静岡県教育委員会が刊行した『静岡県遺跡地名表』『静岡県遺跡地図』<sup>(2)</sup>に部分的に紹介されているにすぎないものであった。またやはり部分的であるが森町考古学研究会が刊行している『森町考古』誌上に時々掲載しているのみであった。このような状況下にあって掛川市教育委員会では、国及び県の補助金を得て昭和56年度から昭和58年度にかけて市内遺跡分布調査事業が行われた。この事業では多くの分布調査員の協力によって市内各所に新発見の遺跡が報告され、この和田岡原において多くの遺跡が新発見として報告された。<sup>(3)</sup>時に和田岡原一帯については、皮肉にも時期を同じくして老化した茶樹の改植が盛んに行われたため比較的密度の濃い報告が得られた。中原遺跡もこうした経過を経て知られるようになった遺跡である。

今回の発掘調査は前回の発掘調査<sup>(4)</sup>の時と同様、老化茶樹の改植計画に端を発したものである。昭和57年に今回の調査地点である掛川市高田字中原1016～1017において改植計画があることを知った掛川市教育委員会では、静岡県教育委員会の指導並びに国及び県の補助金を得て今回の発掘調査を行うこととなった。発掘調査の目的は、開発行為に伴う遺跡破壊に先立つ事前の発掘調査で、記録保存を目的として行ったものである。

### （註及び参考文献）

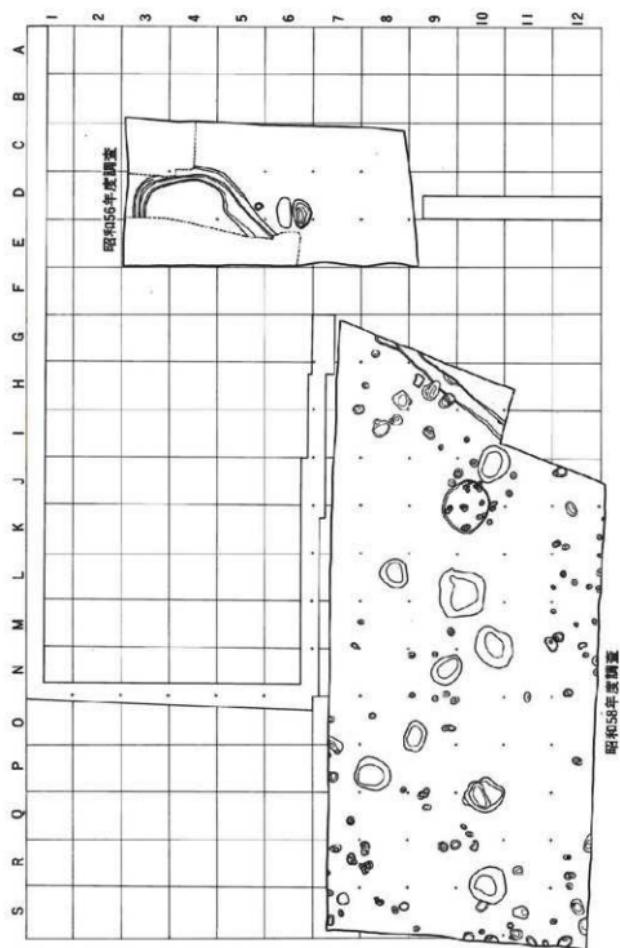
- (1) 戸塚賢二 「吉岡踏査」『ふるさと』21号・掛川西高等学校郷土研究部 1966
- 鈴木治男 「庵の下遺跡表面採集」『ふるさと』21号・掛川西高等学校郷土研究部 1967
- (2) 静岡県教育委員会 『静岡県遺跡地名表』『静岡県遺跡地図』 1979
- (3) 加藤賢二 「小笠郡菊川町採集の縄文早期土器」『森町考古15』 森町考古学研究会 1980
- (4) 和田岡原においては、加藤賢二夫妻の長年の踏査による報告が詳しいものであり、その他大橋保夫・伊藤美鈴・窟野俊明・内藤二郎・仲屋栄一・原田耕治各氏の報告がある。
- 掛川市教育委員会『掛川市遺跡地名表』(1982)『掛川市遺跡地図』(1983)
- (5) 掛川市教育委員会『中原遺跡発掘調査概報』1982

## 2. 調査の方法と経過

今回実施した調査区は、前回の調査(1982年)<sup>(1)</sup>区の南から南西にかけて隣接して位置した地点で、発掘調査面積はおよそ1100m<sup>2</sup>である。

第2図グリッド配置図に示したとおり今回の調査でも前回の調査のグリッド設定にならいグリッド設定を行った。つまり、調査区に一辺4m四方の網目を掛け、杭およびグリッドの起点を前回設定のA1杭に求めた。そして杭およびグリッドの呼称についてもA1杭を起点とし、グリッドの北東に位置する杭の名称をそのグリッドにそのまま充て呼称した。例えば、H8杭の南西位にあるグリッドの名称はH-8グリッドとするものである。尚、グリッドライン南北の方向はN-11°01' Eである。

また、調査時における出土遺物の取り上げは、遺構内出土遺物についてはドットによる図化を行い出土地点および出土レベルを計測した後取り上げることとした。遺構以外からの出土遺物については、



第2図 ケリッド配置図

調査地内では耕作土が遺構確認面（IV層ローム層上面）付近までおよんでいる為、グリッド一括出土資料として取り扱うこととした。

このように今回の発掘調査では、前回の発掘調査方法に従い行ったものである。次に今回の発掘調査の経過について述べることとする。

発掘調査では、まずはじめに調査区北壁部および東壁部に150cm幅のトレントを設定し、遺物包含層残存状況確認を目的として人工による試掘を行った。この観察結果を元にして次に重機を導入し、耕作土のみの掘削を行った。そして本格的に人工による手掘り作業に入り発掘調査がはじまった。以下日程を追って発掘調査経過を述べていく。

昭和58年11月7日～9日 調査区への発掘器材の搬入。老朽茶樹の抜根・焼却、調査区北壁部・東壁部において土層確認の為のトレント掘り（試掘）を行う。

11月10日～12日 重機稼動。耕作土の掘削を行う。

11月14日～30日 調査区全域にわたって人工による耕作土の掘削、遺構の確認を行う。この結果、縄文時代以降の遺構SD01、不明遺構SX多数、縄文時代の遺構SB01、土坑SF、小穴SP等を確認した。

11月28日～ SD01の掘り下げを皮切りに各遺構の掘り下げを行う。遺構の掘り下

12月21日 げにおいては覆土観察、遺物出土状況の観察、写真撮影・図面取り等の作業を行う。

12月22日～1月10日 調査区全体の完掘状態写真の撮影、及び全体図の作成を行う。

#### （参考文献）

- (1) 掛川市教育委員会『中原遺跡発掘調査概報』1982

### 3. 遺跡の地理的・歴史的環境

#### (1) 地理的環境

現在の国道1号線を掛川市内から西へ車で10分程走ると袋井市との市境に行きあたる。この市境となる所に流れている川が、流域に数多くの遺跡をもつ原野谷川である。この原野谷川は、上流域から中流域の各所（特に右岸）に河岸段丘を形成している。これらの河岸段丘は、多くの場合小規模なものである。中でも河岸段丘の特に発達している地区は、上流から原田・原谷・和田岡の地区で、ここには河岸段丘面を立地条件の一つとして営んだ縄文時代の集落址が数多く所在・分布している。ここで紹介する中原遺跡もその一つで、立地する和田岡原は原野谷川が形成した河岸段丘のうちで最も広大な面積をもつ段丘である。ところで和田岡原とは、各和原・高田原・吉岡原の総称で、中原遺跡の立地する原はこのうちの吉岡原である。

ところでこの和田岡原一帯を地質的に眺めてみると、段丘堆積層の分布域にあたる。これは、発掘調査時に行った土層観察から裏付けをするような結果を得ている。つまり地点による高低差はあるものの、おおむね現地表下1m程の所から黄褐色の疊層が顔を出し始めてくるのである。

地形的に眺めてみると、和田岡原の中で最も広い面積をもつ吉岡原は、大きくみて2段の段丘面をもっている。この2段の段丘面はそれぞれ上の段丘面（中原遺跡が占地する）が標高およそ60m、下の段丘面が標高およそ50mを測るものである。挿図第3図に示したように吉岡原は、北から南へ徐々に傾斜して行き、南の高田原では標高およそ40mの段丘面となる。また各和原は、高田原・吉岡原の

西側を北に深く入り込む小谷を挟んで高田原の南西側に位置しており、南北方向に細長く平坦面が続く段丘面である。各和原の標高は、ほぼ50m台を割っている。尚、高田原・吉岡原と各和原相方を切り離すこの小谷が存在することにより、高田原・吉岡原の一部が舌状に張り出す舌状台地状の地形が形成されている。

#### (註及び参考文献)

- (1) 掛川市内全域にわたる地質図は、掛川市教育委員会『ふるさと発見第3集、掛川の植物』(1981)に収録されている。この他掛川市の地質に関しては、「掛川地方地質図」(1963)地質調査所が詳しい。

#### (2) 歴史的環境

中原遺跡が吉岡原の上位段丘面上に立地していることは先述したとおりである。この吉岡原を始め高田原・各和原(総称和田岡原)には和田岡古墳群が立地していることは古くから広く知れ亘っていることである。つまり吉岡原には中原遺跡と隣接して上位段丘縁辺部に吉岡大塚古墳(5世紀、全長55.0m・後円部径41.3m、前方後円墳)、下位段丘縁辺部に春林院古墳(5世紀、直径30m、高さ5m、円墳)がある。高田原に至ると行人塚古墳(年代不詳、全長45.5m・後円部径28m、前方後円墳)そして瓢塚古墳(5世紀、全長63.0m・後円部径37.8m、前方後円墳)がある。そして各和原に至っては各和金塚古墳(5世紀、全長66.4m・後円部径51.2m、前方後円墳)等の和田岡古墳群が存在していることが知られている。

次に縄文時代の遺跡分布について概観していこう。

掛川市において該期遺跡が最も多く分布している地域は原野谷川流域である。分布の集中する地域は大きく見て3つに分散しており、その一つが萩ノ段遺跡・上ノ段遺跡の所在する上流域原田地区、そして中原遺跡・吉岡原遺跡・瀬戸山遺跡などがある中流域の和田岡地区、もう一つが原野谷川の侵蝕によって独立丘状になった岡津原一帯に縄文時代の遺跡が集中している。

次に縄文時代を時期細分しそれぞれの時期における遺跡の分布状況をみると、

(早期) 原田地区…萩ノ段、和田岡地区…瀬戸山Ⅰ・Ⅱ、岡津原…黒田(向山)

(前期) 原田地区…萩ノ段

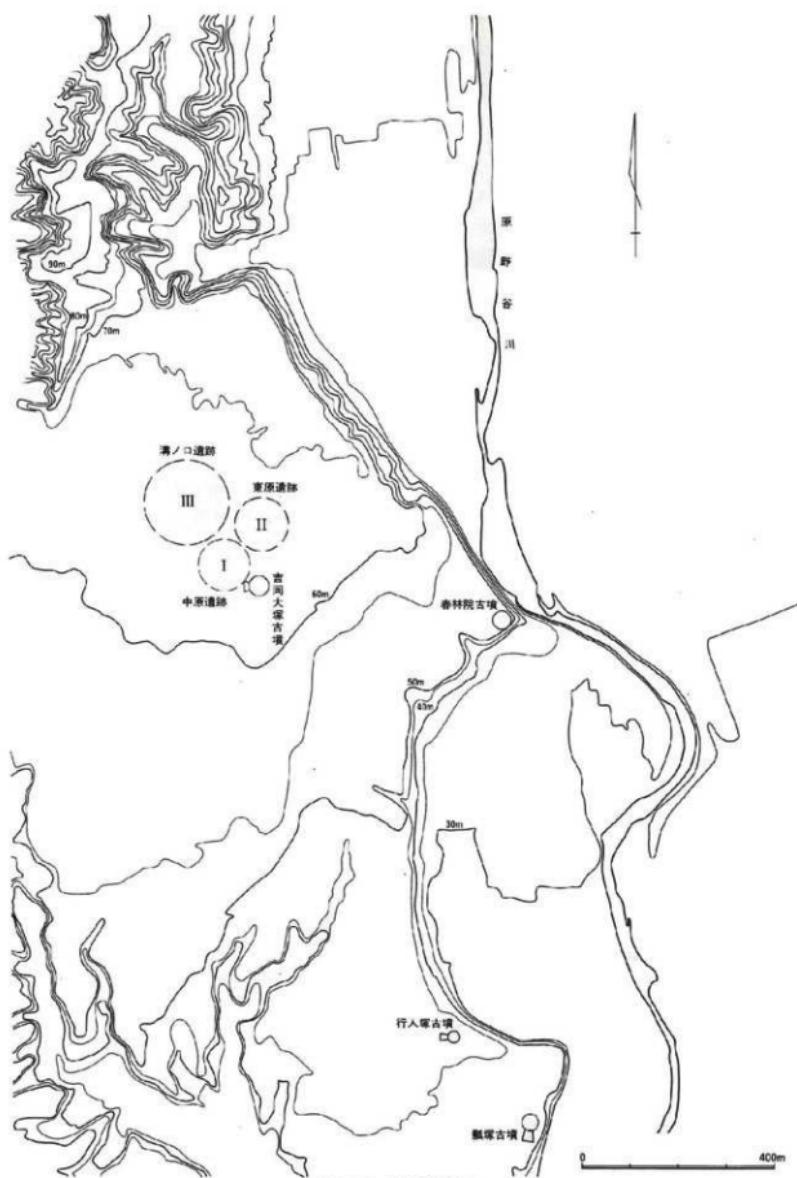
(中期) 原田地区…上ノ段・平Ⅲ・松下・和田、和田岡地区…中原・東原・溝ノ口・吉岡原・瀬戸山Ⅰ・Ⅱ・吉岡下ノ段・女高、岡津原…岡津原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

(後期) 原田地区…上ノ段・平Ⅱ・烏瀬、和田岡地区…瀬戸山Ⅰ・中原・吉岡原・吉岡下ノ段、岡津原…岡津原Ⅰ

(晩期) 原田地区…上ノ段・平Ⅲ・烏瀬

といった分布状況が観られる。整理して述べると、早期には遺跡数が全体的に少ないものの流域各所に分布が見られる。前期では、遠江地方全般の傾向と歩調を合わせるかのように遺跡数が極端に少なく、掛川市内にあっても唯一ヶ所萩ノ段にて十三善苔式土器片が見られるのみである。中期は市内全域に遺跡が分布拡大する時期である。そして後晩期にむけて遺跡数が減少し、晩期に至っては上流域の原田地区のみ遺跡が存在しているようである。

このような時代変遷の中にあって中原遺跡は、中期前葉から人々の集住が始まり中葉期に最盛期をむかえて後葉期に入っていたと思われる。



第3図 周辺地形図

## II 調査の内容

中原遺跡は、縄文時代中期の集落遺跡として知られている。前回の調査でもそうであったが、今回の調査でも縄文時代中期前葉から中葉期を中心とした遺構・遺物が検出・出土している。

つまり、今回の調査で検出した遺構は、縄文時代中期の遺構として竪穴住居跡1基、土括7基、その他に小穴多数であった。その他の時期、縄文時代中期以降の遺構としては溝状遺構1本、意味不明の竪穴遺構9基、その他小穴が多数検出確認した。後の遺構を縄文時代中期以降の遺構とした理由はこれら遺構からの出土遺物が皆無であること、また縄文時代前期以前の遺物が周辺特に今回調査した周辺域から出土・表探したという報告が無いことからである。

また、出土した遺物については挿図第15図～第24図に示したとおり、土器の他に石鎌、石錐、石匙、石錘、定格磨製石斧、打製石斧、磨石、石皿等の石器類、そして土製円盤であった。これらは、いずれも縄文時代中期の遺物に見られる特徴をもちあわせており、したがってここでは全ての遺物を縄文時代中期の遺物であると報告する。余談であるが、縄文時代中期以降の遺構のうちで意味不明遺構としたもののうち一つの遺構から明らかに勝坂Ⅱ式土器の小破片が出土したが、これは出土状況、出土地点の覆土状況、破片に対する遺構の規模のあり方等から考慮してこの土器小破片が遺構の構築時期を決定し得る資料とならないと判断し、この遺構を縄文時代中期以降の遺構として取り扱うこととした。

中原遺跡の今回の調査地点は、從前から知られている表探資料の分布範囲から推定した遺跡の範囲から見て、遺跡の南限域にあたっており、今回の遺構検出状況はそれを裏付ける結果となった。したがって今回の調査によって、中原遺跡の南限域のようすが明らかになったとするものである。

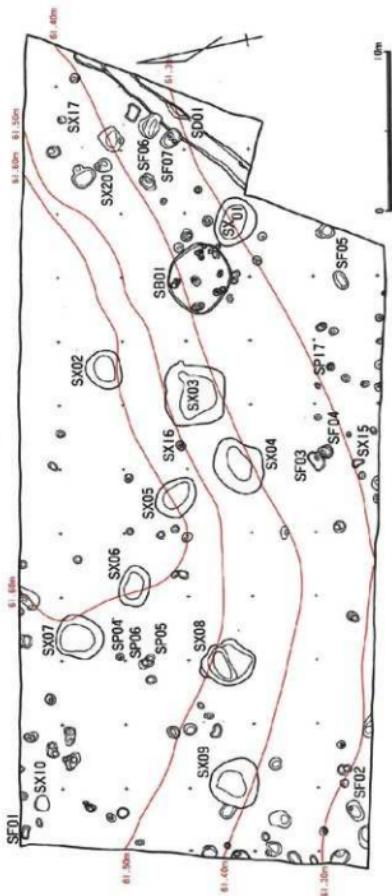
次に、今回確認した遺構・遺物のようすを時期別に項目に分けて説明していくこととする。

### 1. 遺構

今回の調査で検出した遺構は、上述したとおり縄文時代中期の遺構として竪穴住居跡1基、土括7基、その他の小穴多数、そして縄文時代中期以降の遺構として溝状遺構1本、意味不明の竪穴遺構9基、ならびにその他の小穴多数を検出した。

縄文時代中期のこの時期の住居跡としては、県内西部地方にあって袋井市大畠遺跡の住居跡に次ぐ調査事例となった。検出したこの住居跡の遺跡内の位置は、表探資料の分布状況からかなり南限域に入っており、この住居跡が集落内にあって南限域に位置している可能性が高く思われる。前回昭和56年度調査時における調査地点は、今回の調査地点の直ぐ北側に隣接する地点であるが残念ながら耕作による搅乱を受けており住居跡そのものの検出は得られなかった。しかし概報に報告したとおり埋甕が検出されておりつまり住居跡の存在が充分に考えられるものであり、表探資料の集中地点と考え合わせ、この中原遺跡の縄文時代中期中葉期の集落が今回調査地点の北側にその中心が広がっていたものと考えられる。

縄文時代中期以降の遺構として溝状遺構を検出しているが、この溝は検出した位置、規模、方向等から昭和56年度検出の溝と結合するものであると予想される。構築年代については、残念ながら今回の調査でも伴う遺物は出土しておらず、本報では縄文時代中期以降の遺構として取り扱うこととした。この他S Xで扱った意味不明の竪穴遺構S X 1～9は、平面規模において住居跡に近く覆土状況からかなり新しい時代の遺構とも考えられるが類似例がなく出土遺物も皆無の状態に近い為、時代、機能



第4図 遺構全体図

ともに不明であるとし意味不明の竪穴遺構として扱った。

次に、縄文時代中期の遺構、縄文時代中期以降の遺構の順に各遺構説明を行うこととする。

#### i 縄文時代の遺構

今回の調査で検出した縄文時代の遺構は、前述したとおり竪穴住居跡（S B 0 1）1基、土塹7基（S F 0 1～0 7）、そして小穴（S P）が多数である。これらの位置については第4図全体図に、そして遺構個々については第5図～第13図に示した。ここでは、これら遺構個々について挿図に従い説明を加えていくことにする。

#### S B 0 1（挿図第5図～第7図、図版Ⅲ～Ⅳ上）

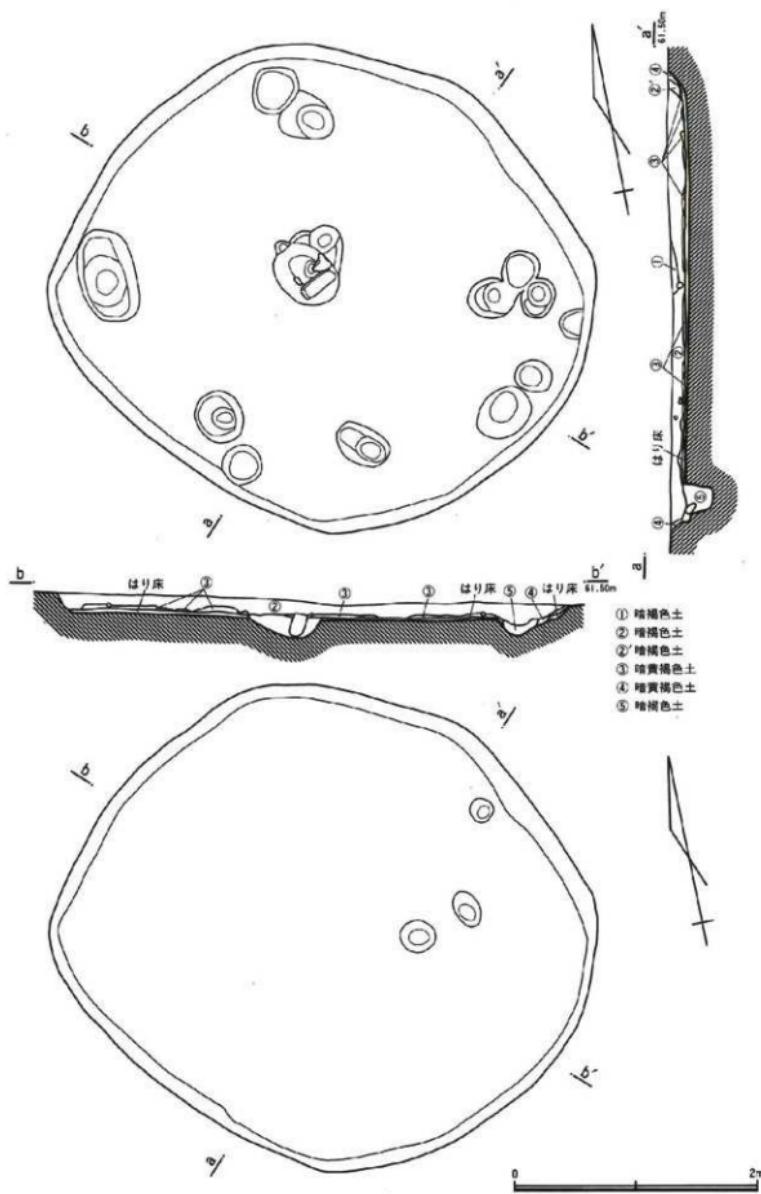
検出位置は、調査区東南域 J～K - 9～10 Grid の範囲に検出した。時期・意味不明遺構 S X 0 1 が S B 0 1 の東南位に接するかのように位置している。住居跡の規模は、長径 4 m 18 cm・短径 3 m 84 cm・確認面からの深度約 10 cm を測る。平面形は、東西方向にやや長い不整円形で、長軸方向は N-4F-W である。壁面は、床面から緩く傾斜して立ち上っており、壁高は平均 10 cm である。床面は、貼床が施されており硬くしまりがある。また床面は、住居跡南東方向にやや傾斜しており北西側が南東側床面より標高で 6 cm 程高くなっている。尚、貼床は炉周辺において最も厚く施されており平均すると 4 cm の厚さをもっている。

炉は、住居跡内長軸線上中央がらやや北西側に寄った位置に検出した。炉からは住居跡長軸線に直交する方向に石が検出しており、石には炉内側上面部にススの付着が観られること、炉床面に密着していることからこの石は炉石であることが確認された。つまり炉は石圓炉であったと判断する。他の炉石については何等検出しておらず、炉石抜掘痕すらも確認できなかった。炉の掘り方は、炉中央部が最も深くなっている皿状を呈している。規模は長径 57 cm・短径 43 cm・住居跡床面からの深度は 16 cm である。平面形は、住居跡長軸線方向に長径をもつ楕円形である。炉内覆土は、3 分層され（第6図参照）①・②はともに暗褐色土で①には多量の炭化粒が含有しており、③には炭化粒は含有されていない。②は暗黄褐色土でロームとの溶混が激しく粘性のある土である。いずれにしても炉内から焼土の検出はなく、炉壁面にも焼成による赤化が観られなかった。

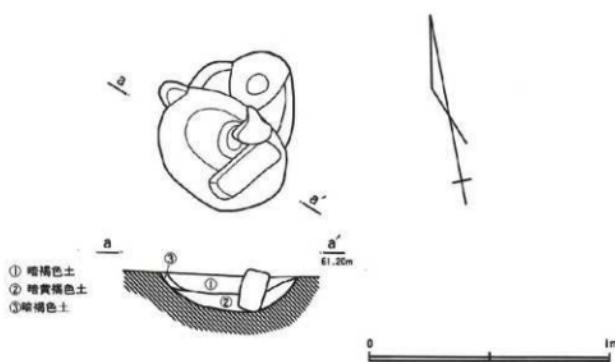
住居跡の柱穴は、第1表に掲載したとおり規模をもっており、これによると主たる柱穴は Pit No 1 4、6、7 の 4 つであると考えられる。柱穴内の覆土は、ローム粒・炭化粒が少量含まれる暗褐色土である。

住居跡覆土は、ほとんど 1 層で暗褐色土（炭化粒・ローム粒が散見される）である。床面付近ではロームとの溶混が激しく黄色味のある土が存在していた。尚、貼床の土はよごれた黄褐色のロームで、かたくしまりをもつ土である。

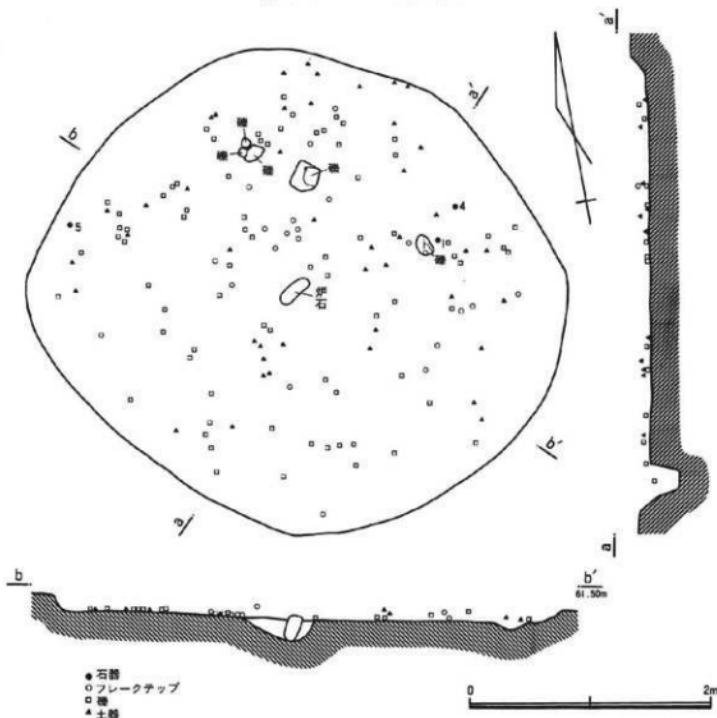
遺物の出土状況は、第7図に示したとおり平面分布では住居跡全体から平均的に出土しており、垂直分布では床面近くからの出土が多く見られた。住居跡覆土が 10 cm 程度の浅いものであったこと、出土土器が全て小破片であったこと（第15図参照）から考えて少々不安も残るが、本住居跡の構築時期は縄文時代中期中葉勝板 II 式期を下らないものと思われる。



第5図 SB 01 平面実測図(上)・掘り方平面実測図(下)



第6図 SB 01炉実測図



第7図 SB 01 遺物出土状況

### S F 0 1 (挿図第 8 図、図版IV中)

検出位置は、調査区北西隅の S - 7 Grid である。周辺には時期・機能不明の小穴が多数存在している。遺構規模は、長径 83cm・短径 44cm・確認面からの深度は 16cm を測る。平面形は長方形で、長軸方向は N - 67° - W である。遺構の掘り方は、床面全体がほぼ平坦で、壁は床面から緩く立ち上っているものである。

遺構内覆土は、ほぼ一層でしまりのゆるい暗褐色土であった。遺構からの出土遺物は、第22図10の定格磨製石斧 1 つで、遺構を確認した面上において出土した。つまり遺構の床面から 14cm 上の面から出土した。

構築時期について詳しく知り得ないが、縄文時代中期を下るものではないと思われる。

### S F 0 2 (挿図第 8 図、図版IV下)

検出位置は、調査区南西付近の S - 12 Grid である。周辺には時期・機能不明の小穴が多数存在している。遺構の規模は、長径 1m 32cm・短径 91cm・確認面からの深度 23cm を測る。平面形は不整長方形で、長軸方向は N - 73° - E である。遺構の掘り方は、床面が丸く、壁も床面から徐々に緩く立ち上っており、全体としては皿状を呈している。また遺構内北東隅において径 26cm 程の凹地があり、土層觀察によれば S F 0 2 よりも古い時期の別ものであることが確認されている（第8図右参照）。

遺構内覆土は、大きく上中下の 3 層に分けられ、上・中層は小礫を含む暗褐色土で、下層（③層）はロームとの溶混により黄色化したしまりのゆるい暗黄褐色土である。

構築時期については、出土遺物が全くなく明確でない。

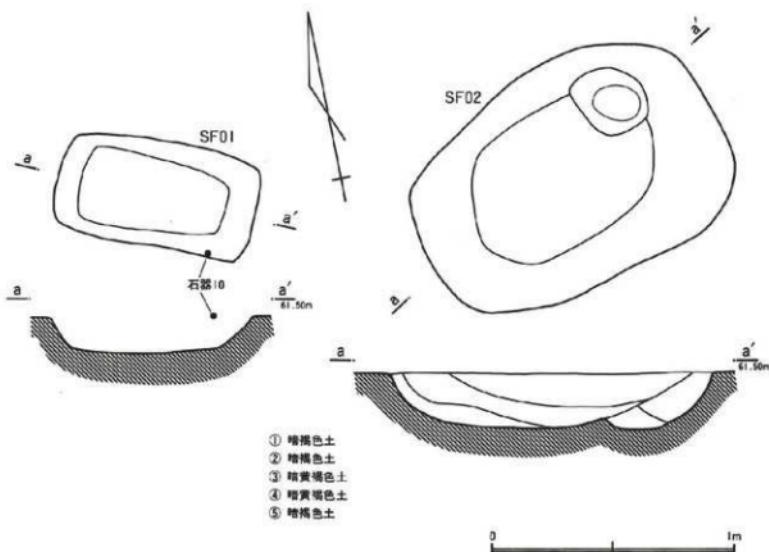
### S F 0 3 (挿図第 9 図、図版 V 上)

検出位置は、N - 12 虍の直ぐ南東位で M - 12 Grid において S F 0 4 と隣接している。この検出位置付近でもやはり時期・機能不明の小穴が検出されている。

遺構の規模は、長径 1m 29cm・短径 81cm・確認面からの深度は 8cm を測る。平面形は不整長方形を呈すもので、長軸方向は N - 65° - E である。床面は、全面がほぼ平坦であるが、中央からやや北東寄りに長径 37cm・短径 26cm・深さ 26cm の平面形が楕円形の小穴が存在している。

遺構内覆土は、ほぼ一層でしまりのよい暗褐色土である。出土遺物は、土器 No.26（挿図第16図参照）で、出土状況は上述の楕円形小穴内に正位に埋置される形で出土した。No.26 土器の底部形態が楕円形であろうことと、この小穴の平面形が楕円形であることは共通しており、やはり No.26 土器が埋置された可能性は大きい。また小穴の外側の平場には掌大の円跡が平面的に見てドーナツ状を呈して検出された。これは、土括覆土状況から判断して No.26 土器の埋置とかなり関係があることが想像され、ここでは同時の人為痕であると判断しておく。

No.26 土器の特徴から判断して、S F 0 3 の構築時期は縄文時代中期前半の五領ヶ台 I 式期併行の時期であったと思われる。



第8図 SF01・02実測図

S F 0 4 (挿図第9図、図版V上)

検出位置は、M-12 Grid 内で遺構北西部において S F 0 3 と接している。

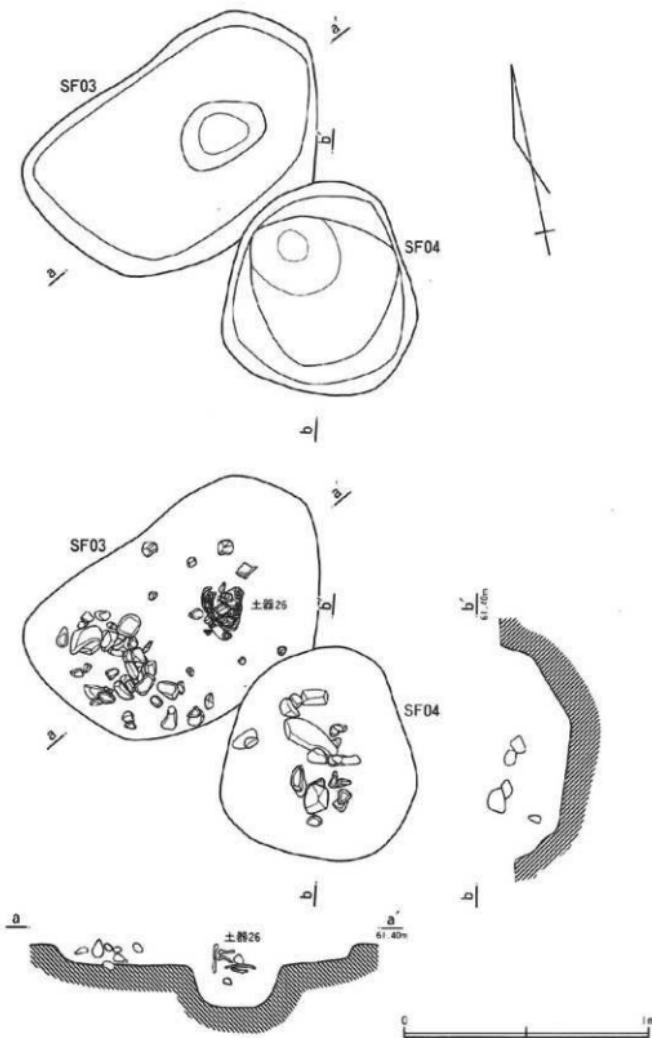
遺構の規模は、長径87cm・短径79cm・確認面からの深度は27cmを測る。平面形は不整円形を呈しており、遺構の長軸方向は N-21° E を指す。遺構の掘り方は、S F 0 3 近くで最も深くなる凹地が存在しており、長軸方向の断面形は腕形を思わせる。

遺構内覆土は、ほぼ一層で小砂利の混ざる暗褐色土である。遺構からは時期のわかる遺物の出土ではなくはっきりとしないが、縄文時代中期の胎土を示す土器片の出土が見られている。この他遺構覆土上層からは、S F 0 3 での検出と同じように拳大の円礫が出土している。この出土状況を断面形において観察すると、礫が土括 S F 上を覆うような形で出土している。したがってこれら礫は土括 S F 0 3 に付随する遺物であると判断している。

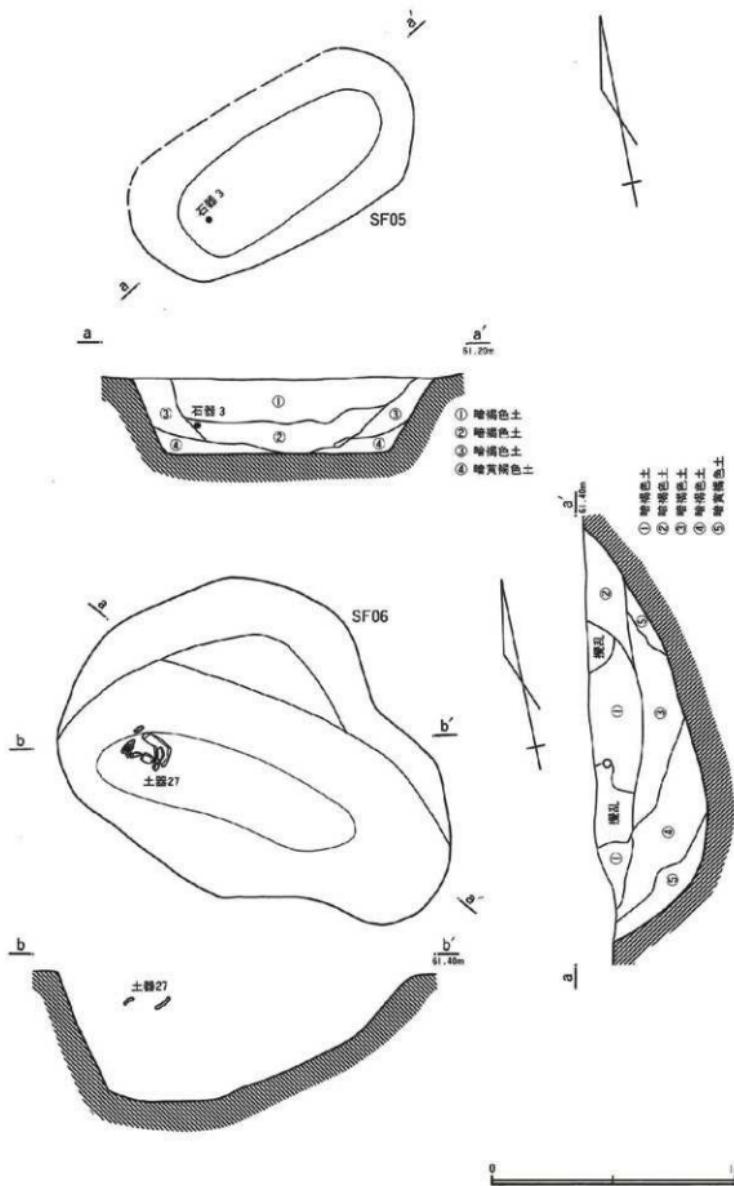
S F 0 5 (挿図第10図、図版V中)

検出位置は、K-12坑の南2m付近の位置で検出。遺構西側には、時期・意味不明の小穴が群在している。

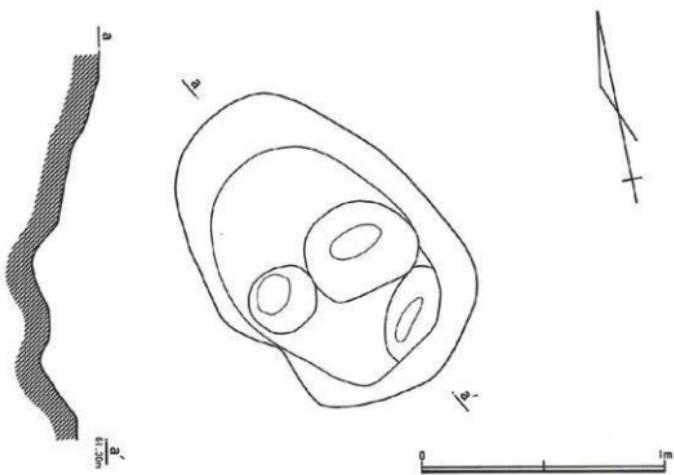
遺構の規模は、長径 1m 28cm・短径 65cm・確認面からの深度は 32cm を測る。遺構平面形は梢円形で、



第9図 SF03・04 実測図



第10図 SF 05・06 実測図



第11図 S F 07 実測図

長軸方向はN-71°Eである。遺構床面はほぼ平坦面を形成しており、壁も急傾斜をもって立上っている。

遺構内覆土（挿図第10図参照）は、①・②層は炭化粒が含まれる暗褐色土で、③層も暗褐色土であるが炭化粒は含まれておらず、ロームとの溶混が見られるのか黄色味のある土である。④層は暗黄褐色土で粘性のある土である。出土遺物は、②層上面部から石鏡No 3が出土している。遺構の構築時期のわかる土器の出土はないが、この石鏡の形態から縄文時代中期としておきたい。

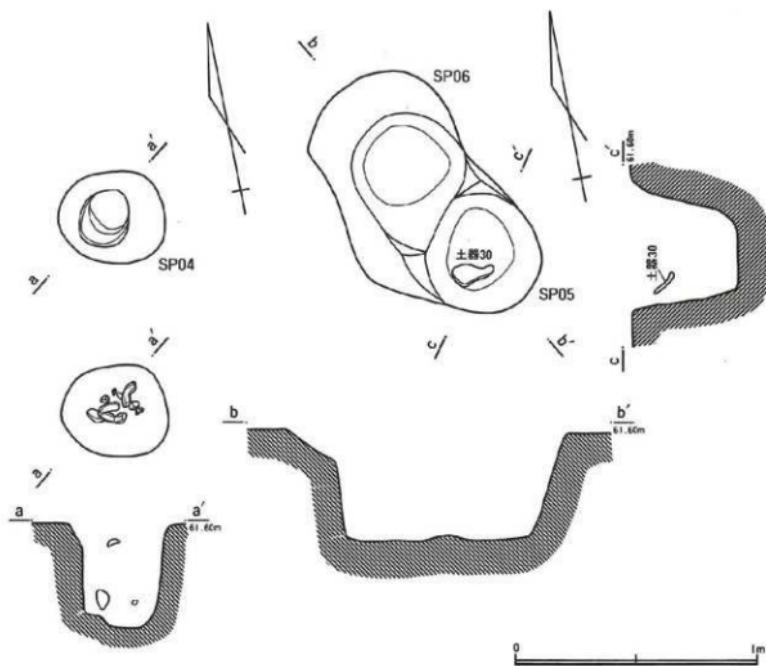
#### S F 06 (挿図第10図、図版V下)

検出位置はH-9 Gridで、遺構の南側にS F 0.7が位置している。また東側端部が後世のものと思われるSD 0.1により搅乱を受けている。

遺構の規模は、長径1m69cm・短径1m26cm・確認面からの深度53cmを測る。遺構の平面形は不整規四角形で、遺構の長軸方向はN-59°Wを指す。遺構の掘り方は、床面がほぼ平坦であり北側壁にテラス状平坦面が形成されている。全体の立上り方は急傾斜である。

遺構内覆土は、①～④層が暗褐色土で、⑤層は暗黄褐色土である。中でも①・③層には小砂利と炭化粒が多く含まれており、①層下面からNa27土器（挿図第16図）が正位に出土している。⑤層はロームとの溶混が見られ全体的に黄色味を帯び、粘性のある土である。

遺構の構築時期は、No27土器の時徵から縄文時代中期前葉五領ヶ台I式期に併行する時期、あるいはそれ以前の時期であると思われる。



第12図 SP 04・05・06 実測図

S F 0 7 (挿図第11図、図版VI上)

検出位置はH-9 Gridで、S F 0 6の直ぐ北側に位置している。S F 0 6と同様後世にS D 0 1により東側端部を搅乱されている。

遺構の規模は、反径 1m 40cm・短径 95cm・確認面からの深度は 28cm を測る。遺構の平面形は不整椭円形を呈しており、遺構の長軸方向は N-32°-W である。遺構の掘り方は、床面に 3 つの凹地がありそれぞれ径が 25~40cm、床面からの深度 10cm 前後となっている。壁は緩い傾斜をもってダラダラと立上る。

遺構内覆土は暗褐色土の單一層で小砂利を含有する土である。詳細に時期のわかる土器は出土しておらず明らかでないが、土器片の胎土の状態から縄文時代中期であることに誤りはないと思われる。

S P 0 4・0 5・0 6 (挿図第12図、図版VI中・下)

Q 9 杭を中心にして北側に S P 0 4 、南側に S P 0 5 、 S P 0 6 が並んで検出。 S P 0 5 と S P 0 6 は切り合ひ関係にあるが両者の新旧関係はつかめていない。

規模は、 S P 0 4 が長径 41cm 、短径 39cm 、確認面からの深度 43cm 、 S P 0 5 が径約 50cm 、確認面からの深度 43cm 、 S P 0 6 が径約 60cm 、確認面からの深度 47cm を測り、それぞれが柱穴状を呈している。

遺物の出土状況は、 S P 0 4 で礫及び土器片が平面中央部に上層から下層にかけて存在していた。 S P 0 5 では No.30 、 32 土器が流れ込むように傾斜して出土している。 S P 0 6 からの出土遺物は皆無で時期不明であるが、 S P 0 4 、 S P 0 5 は土器の特徴から縄文時代中期中葉期と考えている。

## II 縄文時代以降の遺構

先述したとおり、縄文時代以降の遺構として溝状遺構 (S D 0 1) 1 本及び時期・意味不明遺構 (S X 0 1 ~ 0 9) 9 基を確認している。以下検出状況を各遺構について述べることとする。

### S X 0 1 (挿図第 13 図、図版 VII 上)

検出位置は I ~ J - 10 ~ 11 Grid の範囲で、 S B 0 1 の南東隣りに検出した。

遺構の規模は、長径 1m 57cm 、短径 1m 25cm 、確認面からの深度は 75cm を測る。遺構の平面形は不整橈円形で、長軸方向は N - 58° - W を指す。遺構掘り方は、床面がほぼ平坦面を成しており、壁面は床面から急傾斜をもって立上る。

遺構内覆土は挿図第 13 図に示したとおり、①層黒色土を囲む形で② ~ ④層が位置していた。特に、②層の黄褐色土は自然堆積層 V 層のように疊層を形成し、硬くしまりのある土であった。

### S X 0 7 (挿図第 13 図、図版 VII 中)

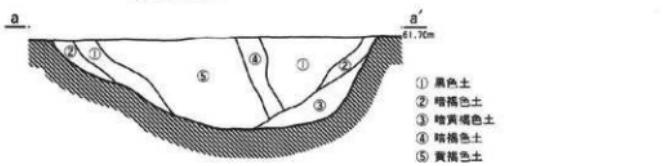
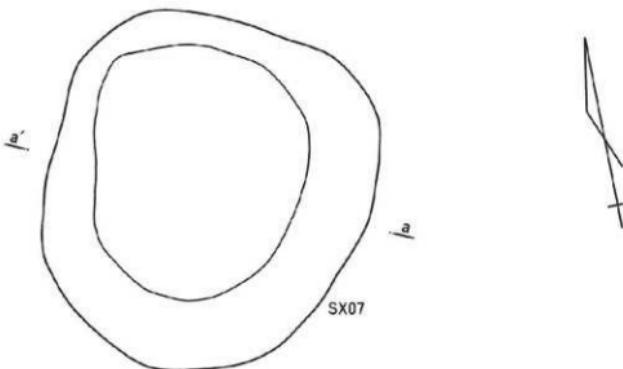
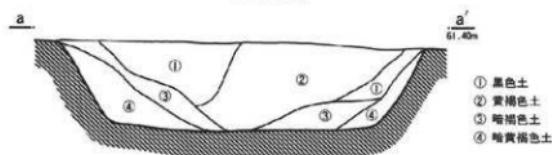
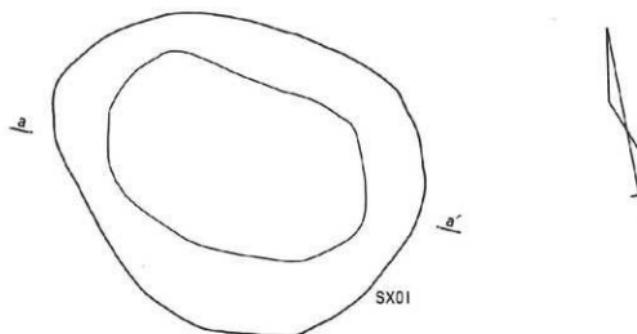
検出位置は P - 7 ~ 8 Grid の範囲で検出。 S X 0 6 の北西に位置しており、南には縄文時代中期の遺物を検出した S P 0 4 、 S P 0 5 が存在している。

遺構の規模は、長径 1m 46cm 、短径 1m 31cm 、確認面からの深度は 78cm を測る。遺構の平面形は不整橈円形で、長軸方向は N - 28° - E を指す。遺構の掘り方は、南東壁が床から緩やかに立上り、北壁では床から急傾斜をもって立上っている。

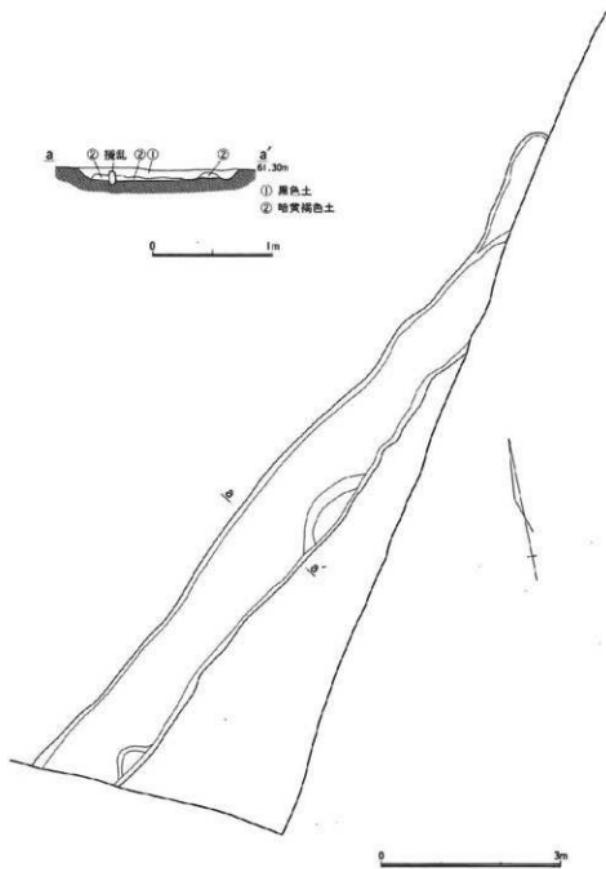
遺構内覆土は、 S X 0 1 と同様①層黒色土を他層が囲む形で形成しており、出土遺物については全く無かった。

S X 0 1 ～ 0 7 と類似した遺構はこの他 S X 0 2 ～ 0 6 、 S X 0 8 、 S X 0 9 がある (挿図第 4 図参照)。遺構の規模はまちまちであるが、覆土状況が S X 0 1 ～ 0 7 と同様黒色土を囲む形で他層が形成されており、出土遺物もほとんど出土しなかった。縄文土器小破片が出土しているが、出土層が自然埋土とは考えられないこと、遺構に対して出土遺物があまりにも小破片であることなどから明確とし得ないものであった。

### S D 0 1 (挿図第 14 図、図版 VII 下)



第13図 SX 01・07 実測図



第14図 SD 01 実測図

検出位置は、G～I～8～II Grid の範囲で北東から南西方向に向く溝で、方向・規模等から前回調査時に確認した溝とつながる溝であると思われる。

規模は、幅 1 m.30cm 前後・確認面からの深度 12cm を測る。溝内には、H-9 Grid・I-10 Grid にテラス状平場があり、溝床は平坦、壁面は床面より緩やかに立上るものである。

溝内覆土は、ほとんど一層で黒色土で覆われていた。溝内からは時期のわかる遺物の出土は無かったが、覆土状況から縄文時代のものとは明らかに異なり別時代の溝と判断している。

## 2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は全て縄文時代に属すもので、他時代遺物は出土していない。これら遺物の内容は、時期のわかる土器でも器形全体を知り得る土器の出土はなくそのほとんどが小破片であった（挿図第15～20図参照）。しかもこれら土器片は、縄文時代中期前葉から後葉に至る限られた時期のもので、その中心期は中葉期になるものと思われる。またこれら土器片の出自地を考えるならば三地域に限定され、中部・関東地方、関西地方、在地の三地域に求められる。石器その他の遺物についてみると、装身具の出土は確認していないが、縄文時代中期に見られる生活具としての石器は各種揃って出土している（挿図第21～24図参照）。

次に、土器、石器その他の遺物の順に個々の遺物について説明していくことにする。

### i 土器（挿図第15～20図）

先述したとおり調査で得られた土器は、ほとんどのものが小破片であり、内容的にも縄文時代中期に限定されるものである。

ここでは、個々の土器片に説明を加える前に下記のように出土土器を分類しておきたい。

#### I群土器 関東・中部地方に型式名称を求める事のできる（系統づけられる）土器群。

- a 類土器 五領ヶ台式に比定される土器群。しかしここで紹介するものは、関東地方で見られるものを直接置き替えることのできない、言い換れば乙福谷遺跡出土土器<sup>(1)</sup>・北裏遺跡出土土器<sup>(2)</sup>等に見られるような、東海的な五領ヶ台式土器と言えよう。
- b 類土器 阿玉台式に比定される土器群。a 類同様関東地方色を逸脱したものである。ここで紹介する土器は、西村氏の分類によると I b 式に属するものが多くを占める。
- c 類土器 勝坂式に比定される土器群。多くは勝坂Ⅱ式に比定されるものであるが、古い様相を示すものも数点みられる。
- d 類土器 曽利式に比定される土器群。ここで紹介する土器は、曾利Ⅱ・Ⅲの各式に大別される。

#### II群土器 関西・瀬戸内地方に型式名称を求める事ができる土器群。

- a 類土器 船元式に属する土器群。ここで紹介する土器群も細別すると船元Ⅱ式・Ⅲ式に分類される。
- b 類土器 里木式に属する土器群。里木Ⅱ式が主るものである。

#### III群土器 他地域に型式名称を求める事のできない土器群で、言い換えば在地的・東海的な土器群である。

- a 類土器 大烟C 2 式に属する土器群。<sup>(3)</sup>ここで紹介する土器群は、大烟遺跡から出土した遺物<sup>(4)</sup>のものではないが胎土・原体・施文法・文様等において共通するものであり、大烟C 2 式に系統づけられるものと思われる為大烟C 2 式に属する土器群とした。

次に個々の土器について上の分類記号を用いて表記し説明していきたい。

#### S B 0 1 出土土器（挿図第15図）

S B 0 1 からの出土土器は、大きく 3 分類される。つまり III-a 土器群（1～11、14）、II-a 土

器群（12、13）、I-C群である。

III-a土器群（1~11、14）全て深鉢形土器の口縁部もしくは胴部破片である。胎土は、褐色（2、11）黄褐色（1、4、10、14）茶褐色（6~9）赤褐色（3、5）を呈しており、全てに長石が含有されている。1~4は、口唇部に半截竹管状工具内皮面使用による連続爪形文が施されている。5は縄文地文に半截竹管状工具による平行沈線文が、6は無文地に細い沈線が施されている。7~9は前垂れのような粘土貼付後半截竹管状工具による刻み、10・11は鋭角なヘラ状工具による三角押文、14には半截竹管状工具外皮面使用によるキャタピラ文がそれぞれ観られる。

II-a土器群（12・13）同一個体と思われる深鉢形土器。胎土は黄褐色を呈し長石粒が含有している。焼成良くかたくしまりのある器面である。粗い繊維質の縄文施文を地文とし隆帯の縁を半截竹管状工具により沈線形成。

I-C土器群（15~25）胎土は、褐色（16・22・23・25）・黄褐色（15）・茶褐色（17~21・24）を呈しており、全てに長石粒・砂粒が含まれている。この他16・17には金雲母粒が、24に黒雲母粒がそれぞれ含まれている。これらの多くは半截竹管状工具によるキャタピラ文が観られ、19・22・23ではその際に結節波状文が並走する。25は、縄文地で、貼付粘土の上にヘラ状工具による平行沈線が観られる。

以上、これらの土器がS B 0 1 覆土内から混在して出土している。

#### その他の遺構出土土器（挿図第16図）

S F 0 3 出土土器（26）胎土は茶褐色を呈し長石を含有する。半截竹管状工具による平行沈線で区画形成。区画内に縄文施文後ヘラ状工具による刻み、橋状把手のある土器である。底部付近にも同様の文様が施される。底部平面形は梢円形を呈する。I-a土器である。

S F 0 6 出土土器（27）胎土は茶褐色を呈し長石を含有する。緩く波状口縁を成す深鉢形上器であると思われる。三条の連続爪形文の直下に垂下する印刻が横位に連続する。I-a土器である。

S F 0 2 出土土器（28・29）28は褐色の金雲母を多含する焼成の良い堅緻な土器である。無節の沈線が横位に走る。I-b土器である。29は胎土が褐色で、雲母・長石を含有する。半截竹管状工具による条線を地文にもつ。III-aに属す。

S P 0 4 出土土器（31・33）31は黄褐色で長石粒を含有する胎土をもつ。口唇直下は無文で、その下に微隆帯に沿ってやや鋭角な三角押文が施される。33は褐色を呈し金雲母を含有する土器で断面三角形の微隆帯に沿って所々有節の波状文が施される。I-b土器である。

S P 0 5 出土土器（30・32）30は褐色で砂粒含有の大形の深鉢形土器の胴部破片である。貼付隆帯により文様表出。32は褐色の長石粒含有の土器である。隆帯に沿ってはば直角の三角押文、三角形印刻文が観られる。30・32共にI-c土器に属される。

その他の遺構出土遺物（34~40）34は、S P 17からの出土で、胎土は褐色を呈し金雲母・長石粒を含有する。粘土貼付後円形の刺突文が施される。勝板式的な土器である。35はS X 10からの出土上器で、胎土は茶褐色、長石粒が含有しており器面ザラザラである。口縁部文様帶として連弧文のみられるII-bに属するものである。36はS X 10からの出土で、平面多角形となる関西的な土器である。37はS X 15出土土器で、胎土は金雲母・長石粒が含有され、褐色を呈する。貼付隆帯により区画文が作られ内を半截竹管状工具により爪形文風に刺突がなされる。38はS X 16出土土器で、長石含有で黄褐色を呈す土器である。縄文地文に半截竹管状工具による平行沈線文・貼付隆帯縁取りが観られる。

II-aに似る。39はS X 17からの出土土器で長石粒・石英粒を含有する黒色の土器である。器面はザ

ラザラで半截竹管状工具による平行沈線文が施される。40はS X20からの出土土器で、長石粒を含む黄褐色を呈す土器である。器面は堅く、粗い繊維による縦文を地文とし、ヘラ状工具によるキャタピラ文が施される。II-aに属する。

#### 遺構外出土土器（挿図第17～20図）

I-a土器群（挿図第17図41～65）地文を縦文とする41～57と、集合沈線の58～65のグループに分けられる。胎土は褐色（44・52・55・56・63）茶褐色（42・43・46・54・65）黄褐色（41・51・64）暗褐色（45・48～50・53・57～62）黒色（47）等を呈す。胎土中には砂粒が多く入り器面がザラザラしたものが多い。しかし43・46・49・50・54・55・57・59・63・65は焼成も良く堅緻である。文様は半截竹管及びヘラ状工具が使用され連続する印刻が多く観られる。41～44は口唇部に連続爪形文が細かく施されている。

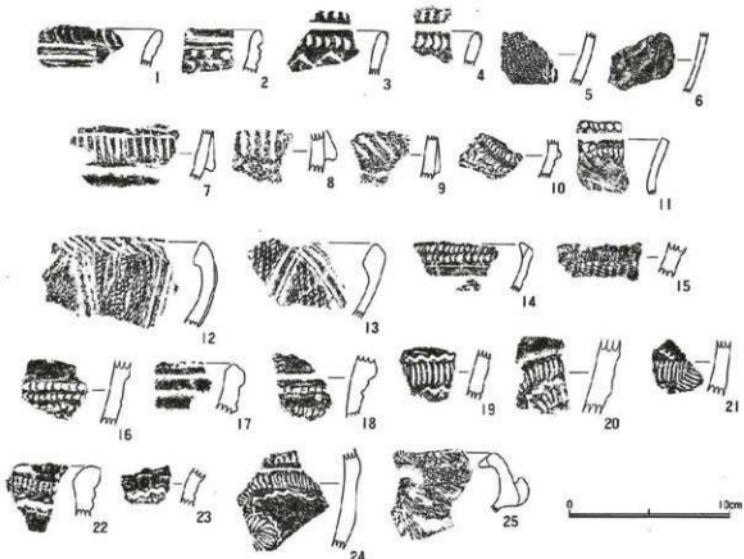
I-b土器群（挿図第17～18図66～84）本土器群の特徴の一つは、胎土中に多量の金雲母が含まれることである。本土器群の胎土中にはこの他石英粒・長石粒が多量に含まれており、焼成も良く堅緻である。しかし71・73～77・84にあってはやや脆い。色調は褐色または茶褐色を呈している。器面には断面三角形の微隆帯に沿って角押文、結節沈線が施される。また79・80にはヒダ状の指押し痕が観られる。尚、83・84の沈線は節のない無節の沈線である。

II-a土器群（挿図第18図85～99）本土器群の特徴は、胎土と施文原体にある。つまり胎土はおおむね黄褐色を呈しており、胎土中には長石・砂粒が多く含まれ堅緻な土器である。そして器厚も薄く8～10mm程である。地文として粗い繊維による縦文が施文され、竹管または半截竹管状工具による円形刺突文、押引き文、キャタピラ文、平行沈線文などが施される。

III-a土器群（挿図第18～19図100～133）胎土は褐色（101・107・109・114・116・118・119・123・128・131）黄褐色（100・102・103・105・106・112・113・117・121・122・124・130）茶褐色（115・133）赤褐色（104・108・110・111・120・125～127・129・132）を呈している。胎土中には基本的に砂粒が混入しており、金雲母が入るもの（100～102・106～108・110・117・124）、黒雲母粒が入るもの（109・110・114・118～120・122・123・125・126・128・130）、長石粒が入るもの（100・101・120・123・126・130）、石英粒が入るもの（109・117・119）がある。また101・104・111～113・117・118・120・121・123～129は器面が堅くしっかりしており、それ以外の土器はザラザラとしている。文様については、半截竹管状工具による口唇部爪形文（100～105）、半截竹管状工具による平行沈線文（106・107・114・120～122・127・131）、口唇及び内面縦文施文（108・109）、前垂れ状の貼付粘土帶（111・117～119）等の文様が観られる。III-a土器群についても器厚が薄く7～8mmのものがほとんどである。

III-c土器群（挿図第19～20図134～176）多くの土器が、色調茶褐色、胎土中に砂粒が多く含まれ器面がザラザラしている。しかし136・137・165・175には胎土中に金雲母が含まれていたり、136・137・168・169は黄褐色で堅緻であったりして異種的な感覚をもつ。器形はほとんどが深鉢であるが、149のみ浅鉢である。器面文様は、半截竹管状工具によるキャタピラ文が主流をしめ、中には三角形印刻・玉抱き三叉文、鋭角な三角押文・間隔の細かなキャタピラ文をもつ古い様相を示す土器も観られる。

II-b土器群（挿図第20図177～183）胎土には基本的に砂粒が含まれており、この他179～181には金雲母が、182・183には黒雲母が含まれている。色調は、177・180・182が褐色、178・179・181・183が黄褐色を呈している。178・182・183は器面堅緻である。他はザラザラである。177・178が輻文地文に連孤文、179～183が半截竹管状工具による平行沈線文が地文となり連孤文が施される。

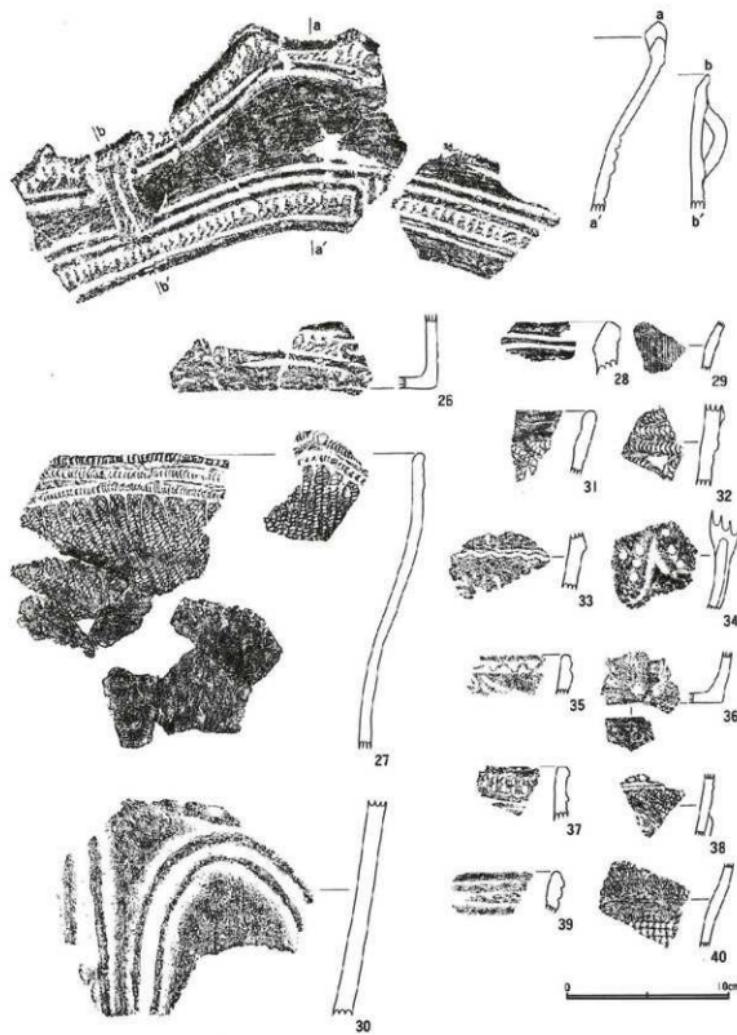


第15図 SB 01出土土器拓影図

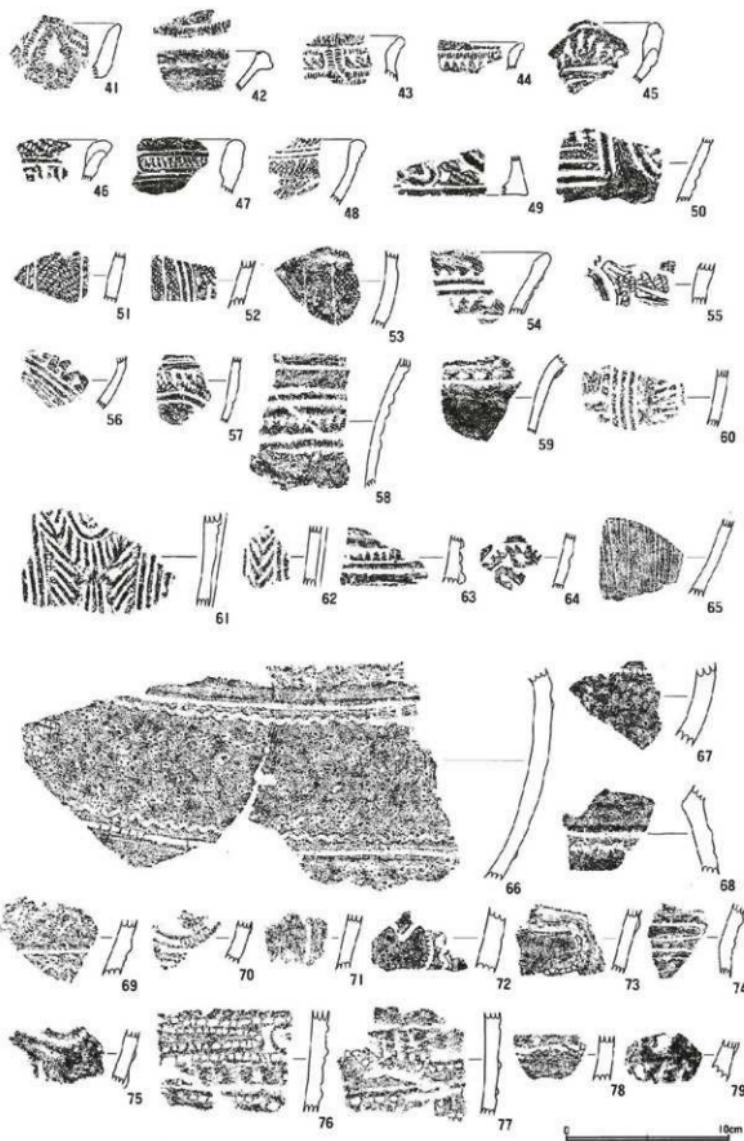
I-d 土器群（挿図第20図 184~190） 184・185は曾利II、185~190が曾利IIIと判断される。184・185は暗褐色を呈す土器で砂粒が多く含まれ器面ザラザラである。半截竹管状工具による平行沈線文を地文とし貼付粘土が施される。186~190は褐色を呈しており、やはり砂粒が多く含まれる。189・190は同一個体で焼成良く堅緻である。他はザラザラしている。文様は、無文（186・188）、縦文地文（187）、区画文内を半截竹管状工具による平行沈線で充填する（189・190）がある。

（2-i 註と参考文献）

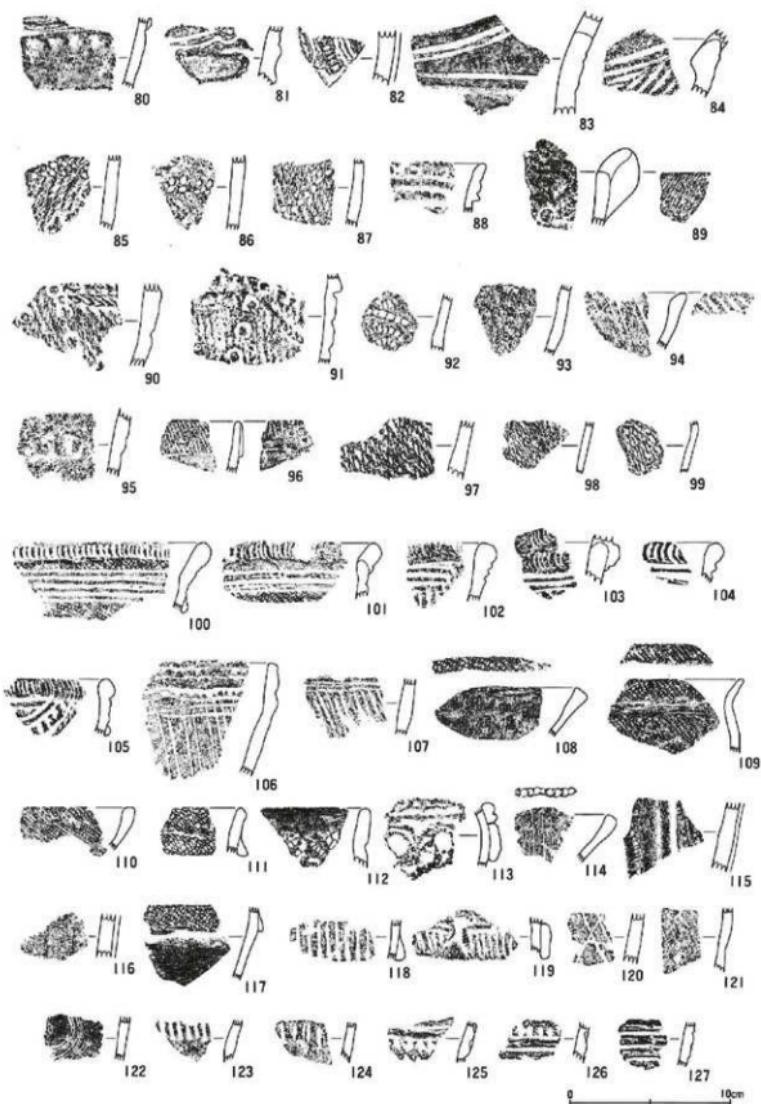
- (1) 井関弘太郎他『先刈貝塚』 南知多町教育委員会 1980 付載第2乙福谷遺跡第2地点
- (2) 紅村弘他『北裏遺跡』 可見町北裏遺跡発掘調査団 1973
- (3) 西村正樹『阿玉台式土器編年的研究の概要—利根川下流域を中心として—』「早稲田大学研究科紀要18」 1972
- (4) 間壁忠彦他『里木貝塚』 倉敷考古館研究集報第7号 倉敷考古館 1971
- (5) 市原寿文監修『袋井市大畑遺跡 1981年度の発掘調査概報』 袋井市教育委員会 1982  
報文中「……便宜上仮称大畑C-2式（大畑遺跡では鷹島式土器が出土しているため中期の2段階という意味として）を設定しておきたい。……」とある。この仮称大畑C-2と内容を同じくする土器群は、今回の調査でも出土している。しかし細かく分析していくと大畑遺跡のものとは少々内容を異にしていることに気付くのであるが、とりあえずここでも仮称大畑C-2という型式名を援用させ分類に努めた。



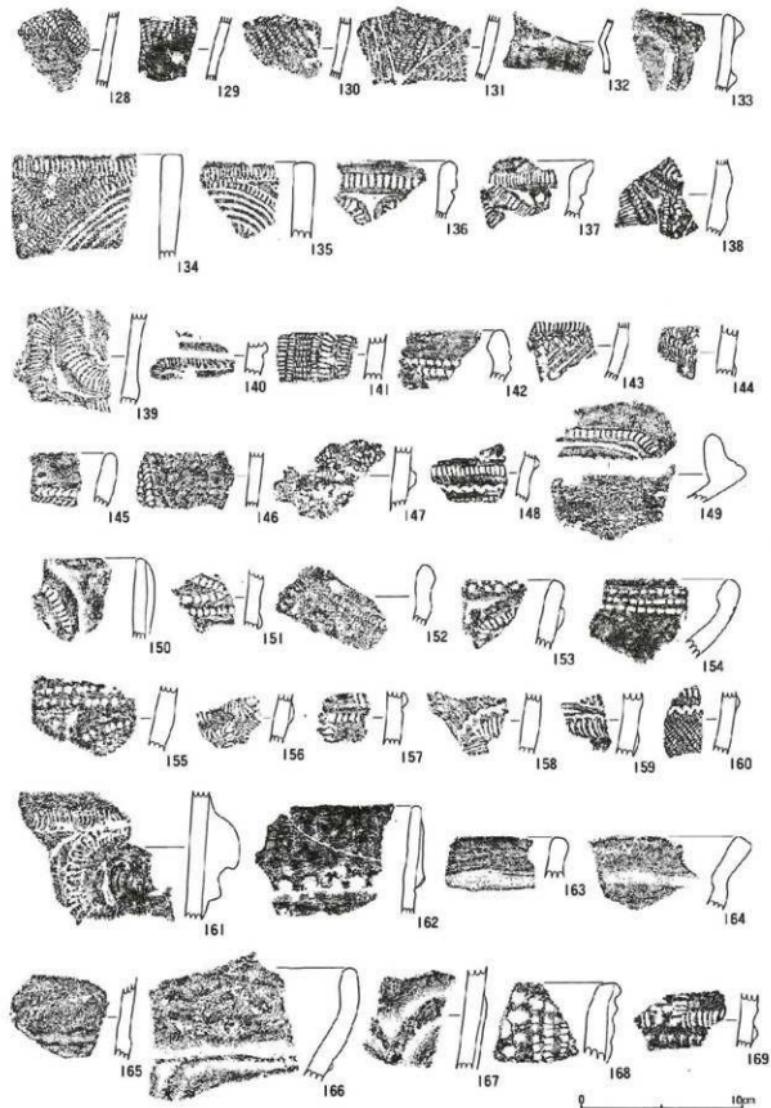
第16図 SF・SP・SX出土土器拓影図



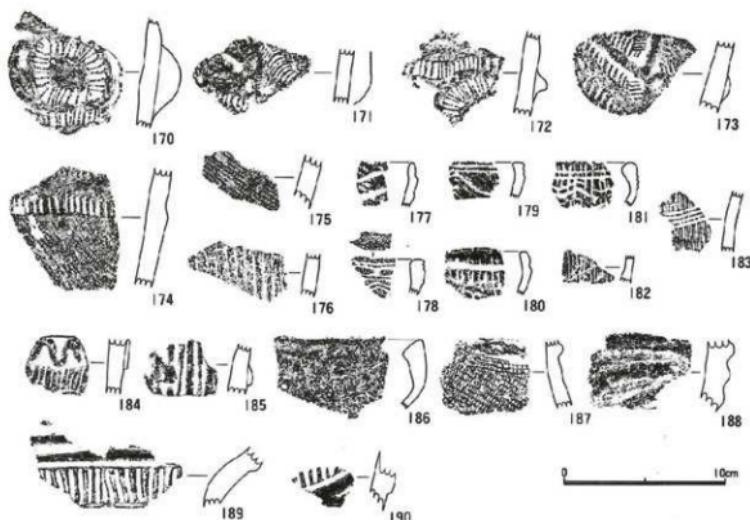
第17図 出土土器拓影図(1)



第18図 出土土器拓影図(2)



第19図 出土土器拓影図(3)



第20図 出土土器拓影図(4)

## ii 石器とその他の遺物（挿図第21～24図）

今回の発掘調査で出土した石器及び土製円盤は挿図第21図から第24図に示したものである。遺構内からの出土品は、SB 01からの出土が1・4・5及び土製円盤1で、SF 01から10、SF 05から3が出土している。他の遺物は全て遺構外出土遺物である。以下挿図石器番号に従い説明していく。

石器1（挿図第21図）は黒曜石製の無茎石鏽である。法量は、重さ 0.22 g・長さ 1.29 cm・幅 0.99 cm・厚さ 0.23 cmである。出土地点は SB 01 内である。

石器2（挿図第21図）は黒曜石製の無茎石鏽である。法量は、重さ 0.73 g・長さ 1.52 cm・幅 1.38 cm・厚さ 0.45 cmである。出土地点は、J-10 Gridである。

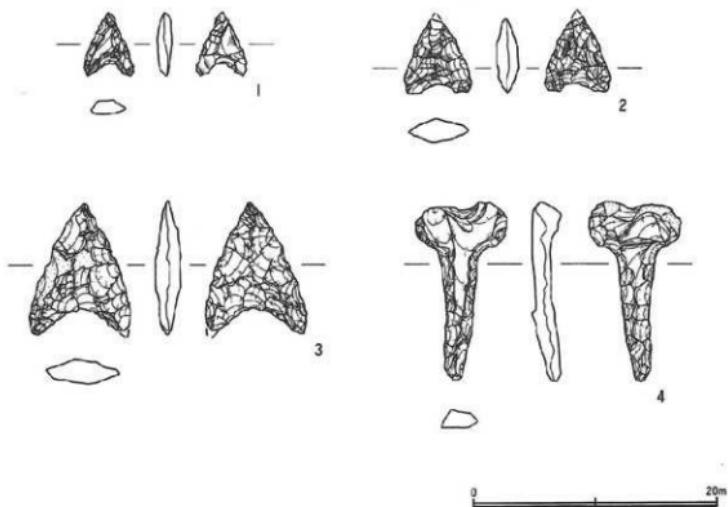
石器3（挿図第21図）は珪質頁岩製の無茎石鏽である。法量は、重さ 1.92 g・長さ 2.58 cm・幅 2.03 cm・厚さ 0.51 cmである。出土地点は SF 05 内である。

石器4（挿図第21図）は珪質頁岩製のつまみをもつ形の石錐である。法量は、重さ 1.93 g・長さ 3.58 cm・厚さ 0.63 cmである。出土地点は SB 01 内である。

石器5（挿図第22図）は、泥岩質の石材使用の横型石匙である。法量は、重さ 17.08 g・幅 4.39 cm・厚さ 1.38 cmである。出土地点は SB 01 内である。

石器6（挿図第22図）は、軟質泥岩製の横型石匙である。法量は、重さ 23.11 g・幅 3.92 cm・厚さ 1.35 cmである。出土地点は、M-11 Gridである。

石器7（挿図第22図）は、砂岩製の横型石匙である。法量は、重さ 30.58 g・幅 7.51 cm・厚さ 0.89 cmである。出土地点は、J-7 Gridである。



第21図 出土石器実測図(1)

石器8（挿図第22図）は、泥岩質製の横型石匙である。法量は、重さ7.95g・幅4.81cm・厚さ0.93cmである。出土地点は、O-10 Gridである。

石器9（挿図第22図）は、硬質泥岩製の石鍤である。上下端部に打ち欠き痕が観られる。法量は、重さ38.64g・長さ5.61cm・幅3.93cm・厚さ1.51cmである。出土地点は、S X 0 4内である。

石器10（挿図第22図）は、硬質の流紋岩製の有溝定格磨製石斧である。溝のない面の刃部に使用痕が観られる。法量は、重さ46.44g・長さ6.23cm・幅3.38cm・厚さ1.21cmである。出土地点は、S F 0 1内である。

石器11（挿図第22図）は、砂岩製の打製石斧破片である。自然面を利用した短冊形（？）打製石斧の破片である。法量は、幅4.76cm・厚さ2.31cmである。出土地点は、R-10 Gridである。

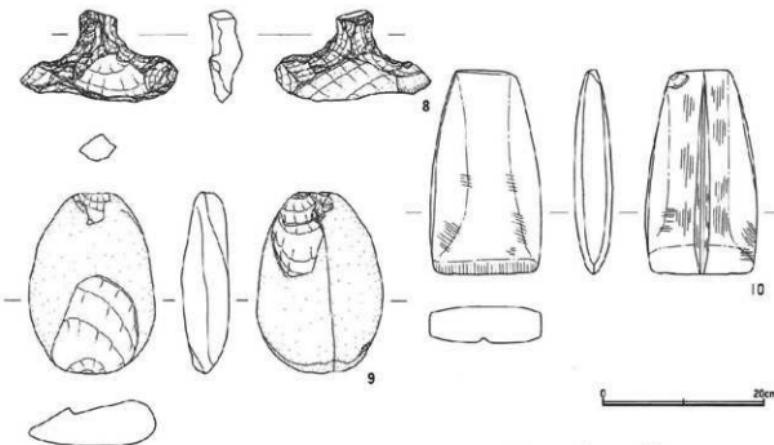
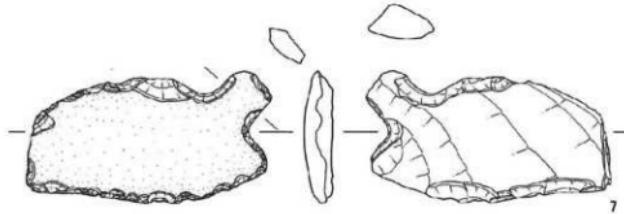
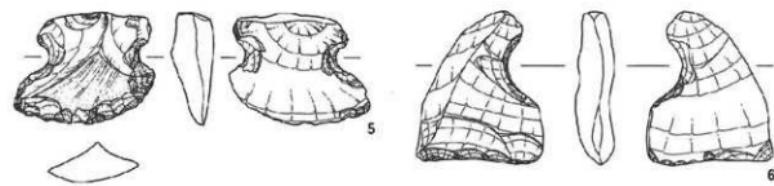
石器12（挿図第22図）は、泥岩質の石材からなる短冊形（？）の打製石斧である。法量は、重さ93.39g・長さ8.41cm・幅4.50cm・厚さ2.30cmである。出土地点は、I-8 Gridである。

石器13（挿図第23図）は、泥岩質の石材からなる短冊形の打製石斧である。法量は、重さ114.99g・長さ10.60cm・幅5.05cm・厚さ1.92cmである。出土地点は、S-7 Gridである。

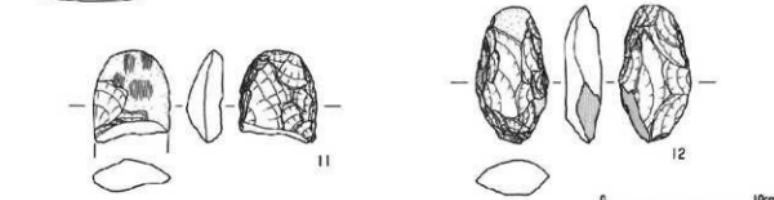
石器14（挿図第23図）は、泥岩質の石材からなる短冊形で丸刃の打製石斧である。法量は、重さ150.08g・長さ10.63cm・幅5.20cm・厚さ2.49cmである。出土地点は、H-9 Gridである。

石器15（挿図第23図）は、泥岩質の石材からなる短冊形の打製石斧で、刃部を欠損している。法量は、幅5.06cm・厚さ2.03cmである。出土地点は、N-7 Gridである。

石器16（挿図第23図）は、砂岩質の石材からなる側刃が内曲し丸刃を呈する打製石斧である。法量

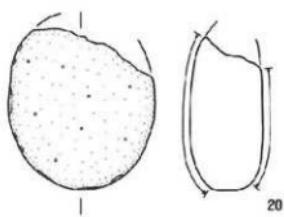
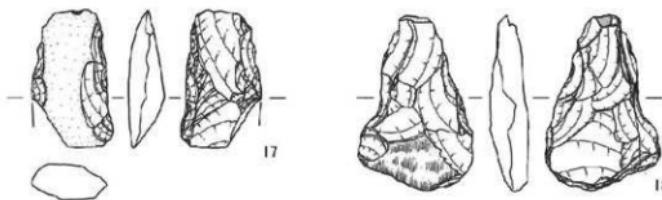
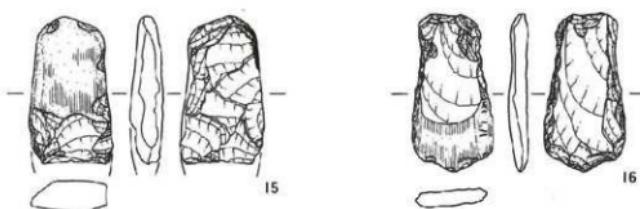
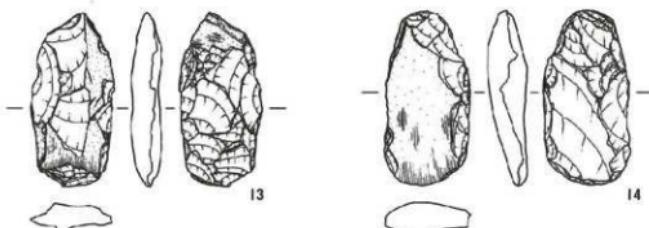


20cm

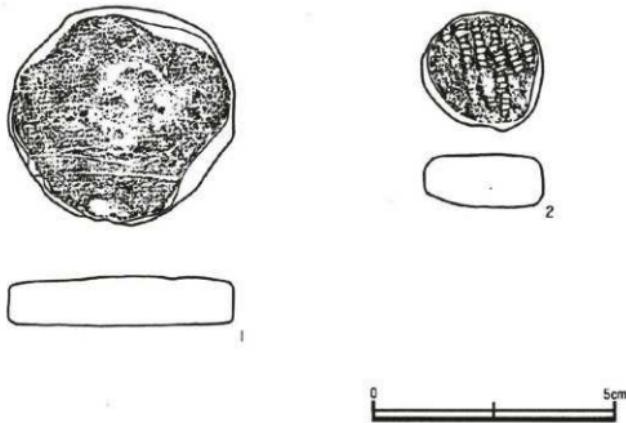


10cm

第22図 出土石器実測図(2)



第23図 出土石器実測図(3)



第24図 出土土製品拓影図

は、重さ 74.34 g・長さ 9.78 cm・幅 5.00 cm・厚さ 1.25 cm である。出土地点は、P-7 Grid である。

石器17（挿図第23図）は、砂岩質の石材からなる橢形の打製石斧で、刃部の一部を欠損する。法量は、長さ 8.50 cm・幅 4.63 cm・厚さ 2.19 cm である。出土地点は、R-8 Grid である。

石器18（挿図第23図）は、泥岩質の石材からなる橢形の打製石斧である。法量は、重さ 162.50 g・長さ 10.72 cm・幅 7.00 cm・厚さ 2.30 cm である。出土地点は、O-7 Grid である。

石器19（挿図第23図）は、綠泥片岩製の分銅形の打製石斧である。法量は、重さ 44.79 g・長さ 7.63 cm・幅 4.95 cm・厚さ 0.80 cm である。出土地点は、G-7 Grid である。

石器20（挿図第23図）は、礫岩質の磨石である。器面は良く使われており摩耗している。法量は、幅 9.03 cm・厚さ 4.45 cm である。出土地点は、K-10 Grid である。

石器21（挿図第23図）は、砂岩質の石皿破片である。これもかなり摩耗しており使用頻度の高かったことがうかがわれる。出土地点は、J-8 Grid である。

土製品1（挿図第24図）は、S B 0 1 出土の土製円盤である。法量は、重さ 25.71 g・最大幅 4.65 cm・最小幅 4.31 cm・厚さ 0.95 cm である。

土製品2（挿図第24図）は、器面に縞文を施す土器破片使用の土製円盤である。法量は、重さ 6.46 g・最大幅 2.43 cm・最小幅 2.31 cm・厚さ 1.01 cm である。出土地点は、M-11 Grid である。

以上が今回の発掘調査によって出土した石器並びに土製品である。これらは、遺構に伴い出土したものは少なく、多くが遺構外出土である。したがって使用時期について詳しくないが、形状その他の特徴から縄文時代中期の遺物と判断してもさしつかえないものと思われる。

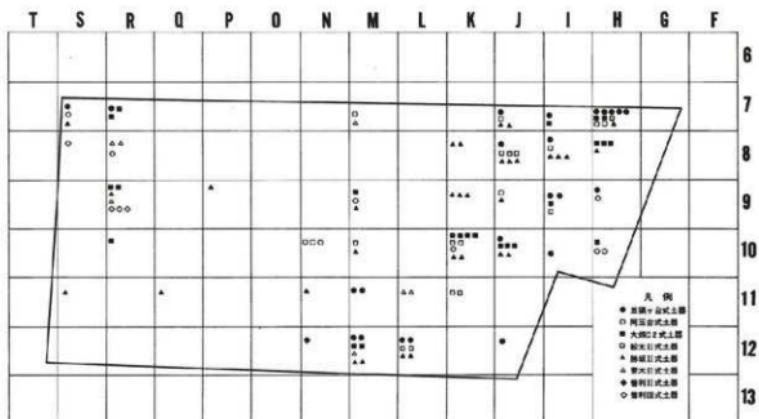
### III 成 果 と 問 題 点

#### 1. 遺跡の動態

吉岡原において発掘調査が行われたのは、静岡大学が行った昭和38年の春林院古墳の発掘調査、<sup>(1)</sup>静岡県教育委員会と掛川市教育委員会が行った昭和54年の吉岡大塚古墳の測量調査、掛川市教育委員会が行った昭和57年の中原遺跡の発掘調査のみである。したがってここで遺跡の動態を記述していくには、発掘調査で得られた資料と数多くの表探資料によってのみ語り得るものとなる。幸なことに掛川市は昭和56年度から3ヶ年に行われた市内の遺跡分布調査を行っている。その時調査員の方々から遺物の分布状況の報告を受けており、その報告資料が遺跡動態を語る良い資料となった。以下これらの資料をもとに中原遺跡周辺の遺物分布状況を明らかにし中原遺跡の位置付けを行いたい。

中原遺跡が占地する吉岡原上の段の遺跡分布状況を図示したものが、挿図第3図周辺地形図である。ここではI中原遺跡、II東原遺跡、III清ノ口遺跡の三遺跡についての遺跡推定範囲を書きしらした。中原遺跡での発掘資料（今回調査分）について発掘調査区内における分布状況を挿図第25図に示した。中原遺跡からの発掘資料は全て縄文時代中期に属するもので古くは中期前葉五領ケ台式期のものから中期後葉曾利Ⅲ式期に至るものまでであった。第25図に使用した資料は、今回報告分の土器（挿図第17図～第20図に掲載した土器）で時期の判明できない無文土器片、細片などはこの対象としなかった為精度の高いものではない。また調査面積が約1,100m<sup>2</sup>であるから中原遺跡全体から見ればごく一部の状況である為に概ねに何かを語ることはできない。ただ傾向として次のことが言えるのではないかと思われる。つまり中期前葉期から中葉期にかけては調査区全域とくに北東部に出土の中心があり、後葉期に入ると調査区西側域に出土分布が移ることが確認できる。調査区北東部寄りには住居跡他の遺構も検出しているので当然とも考えられるが集中が観られた。余談であるが遺物の出土が集中する箇所に遺構が存在するという検証は、かつて新山遺跡の発掘調査によって試みられたことである。第25図において確認されたことは、表探資料による分布状況とも合致するところである。表探資料による時期的分布状況は、吉岡大塚古墳を中心として西側部（今回の調査地点も含めて中原遺跡の推定範囲第3図におけるIの範囲）に中期前葉から中葉期かけての遺物が採集されており、北側部（挿図第3図のIIの範囲）においては、北星敷式及び勝坂Ⅲ式に属される土器が採集されている。また中原遺跡の北側部（挿図第3図のIIIの範囲）においては、船元Ⅱ式及び加曾利E式後半のものが採集されている。つまり中原遺跡Iを中心とすると西乃至は北西部に新しい時期の土器が採集されているという事実は、今回の調査における調査区西側域に後葉期の土器が出土しているということとはほぼ合致すると言えよう。

ところで当該地方における縄文時代中期土器型式の編年に対比させて中原遺跡及び周辺遺跡の動向をまとめてみると次のようなことが言えてくる。つまり吉岡原上の段丘面において中期前葉期に中原遺跡Iの地域内に縄文時代人の居住が開始され、中期中葉期にはIから東原遺跡IIへと移住が行われ、あるいは一部がIから清ノ口遺跡IIIへと移住が行われたものと考えられる。そして中期中葉期にいたってはIIIの地域のみに居住していたと思われる。また、この採集土器の分布状況を縄文時代に観られる結果として馬蹄形集落が形成されていることを想定してあてはめてみると、Iを起点として東西両側に竪穴住居跡の分布が広がりをみせ、最終的（中期後葉）にはIの北西部IIIに集落の中心が移っていたと解釈される。



第25図 出土土器分布図

(註及び参考文献)

- (1) 内藤晃編『春林院古墳』春林院古墳調査委員会 1966
- (2) 植松章八・岩井克允他『吉岡大塚古墳』測量調査報告書 掛川市教育委員会 1980
- (3) 平野吾郎・岩井克允他『中原遺跡発掘調査概報』掛川市教育委員会 1982
- (4) 遺跡分布調査員として、加藤賢二・加藤くみ子・伊藤美鈴・大橋保夫・仲屋栄一・原田耕治・窪野俊明・内藤次郎各氏に御協力いただいた。
- (5) 戸沢充則他『新山遺跡』東久留米市埋蔵文化財調査報告第8集一 新山遺跡調査会・東久留米市教育委員会 1981
- (6) 表探資料による時期的分布状況については、特に加藤賢二氏の御教示を得た。
- (7) 遠江地方における縄文時代中期の土器型式編年については、向坂綱二「遠江における縄文土器の変遷」『遠江考古学研究』4(遠江考古学研究会 1970)の他、加藤賢二「遠江における縄文中期の概要」『森町考古』15(森町考古学研究会 1980)、永峯光一「大別としての中期」『縄文土器大成』2—中期(講談社 1981)等がある。ここでは、細部についての前後関係・並行関係はともかくとして、大きな流れのみに着目して対比させた。
- (8) 縄文時代の集落遺跡を調査した場合、完掘状況において我々は視覚的に馬蹄形なりドーナツ状なりの集落形態を確認する。しかしこの状態は、各時期の住居跡が重ね合わさった形として確認されるのであり時期細分することによって時期毎に住居跡がまとまりをもっていることが明らかとなっている。したがって表現として“結果としての馬蹄形集落”とした。尚、縄文時代集落址検出の住居跡を時期細分し検討をえたものに、八幡一郎他『高根木戸—縄文時代中期集落址の形態—高根木戸遺跡を中心として』『遺跡研究論集Ⅰ』遺跡研究会 1981、八幡一郎・岩崎卓也他『貝の花見塚』松戸市文化財調査報告書第4冊 1973等の報告がある。

## 2. 造構について

今回の調査で明らかとなった造構のうちで主たる造構としてあげられるものにSB 01(堅穴住居跡)がある。そこでここでは住居跡について、遠江地方における縄文時代中期中葉に属する住居跡の類例を求めて、それらの特徴(属性)をまとめ、さらに関東地方でみられる住居跡のあり方と比較検討を加えたい。

まず、今回の調査で検出した住居跡SB 01の属性について今一度整理羅列すると、勝坂Ⅰ式期に属する住居跡で、平面形が不整円形、規模は長径4m 18cm・短径3m 84cm、炉は石囲い炉、柱穴構造は4本主柱構造が考えられる。<sup>(1)</sup>ところで遠江地方における該期前後の住居跡は、若干古手の大烟遺跡(袋井市)<sup>(2)</sup> E 5住居跡と半田山Ⅲ遺跡SB 1の2基のみが今のところ確認されているものである。大烟遺跡E 5住居跡は、駿河式期に属する住居跡で、平面形がほぼ円形、規模長径4m 20cm・短径4m、炉は不明、柱穴構造は4本主柱構造と考えられる。半田山Ⅲ遺跡SB 1は、平面形が不整形、規模長径5m 30cm・短径5m 22cm、炉は石囲い炉、柱穴構造が5本主柱構造と考えられる。SB 1の構築時期は不明であるが周辺からの出土遺物は中期前葉から中葉期にかけての時期の土器片である。以上、遠江地方における該期に属する住居跡の例であるが、ここで一まず属性についてまとめてみると、住居跡の平面形はほぼ円形、炉は石囲い炉、柱穴構造は主柱4本乃至5本の構造であると考えられる。また壁溝、壁柱穴等の住居跡に付随する施設は確認できないが、出入口部施設を形作る柱穴が存在することは確実であるように思われる。<sup>(3)</sup>

次に関東地方において検出した該期堅穴住居跡の特徴をあげてみると、住居跡の平面形はほぼ円形、炉の形態は埋甕炉が主体をなす。主柱は4本で上屋を構築したと思われ、壁溝無く、壁柱穴が存在する住居跡が見られる。また住居跡の出入口部施設を想定できる小穴が存在するのである。ここで前記した遠江地方で確認した住居跡の属性事項を比較してみると、炉形態が石囲い炉であること、壁柱穴が存在しないことが遠江地方の住居跡の特徴としてあげられる。家造りの作業が村の構成員全員の協力により行ったということを前提条件として考えるならば、土器形式の上で確認される地域差同様住居建築の上でも各地の特徴が堅穴住居跡の属性にも表出してくるものと思われる。<sup>(5)</sup>したがって上で確認した特徴の違いは地域差からくる特徴であると認識するものであるが、現況では該期住居跡の類例が少なく傾向としての違いの可能性もある。今後の資料の増加を待って検討したい。

### (註及び参考文献)

(1) 橋本正「堅穴住居の分類と系譜」『考古学研究』Vol.23・No.3(1976)の中で「主軸によって堅穴平面は相似形に二分され、主柱は主軸上に乗るものと主軸を挟んで対峙するものにわかれれる。炉は全て主軸上に乗り、穴など他の施設(部分構造)の多くも主軸上に乗る。…」に従い主柱構造を考察した。

(2) 市原寿文化「袋井市大烟遺跡——1981年の発掘調査概報——」袋井市教育委員会 1982

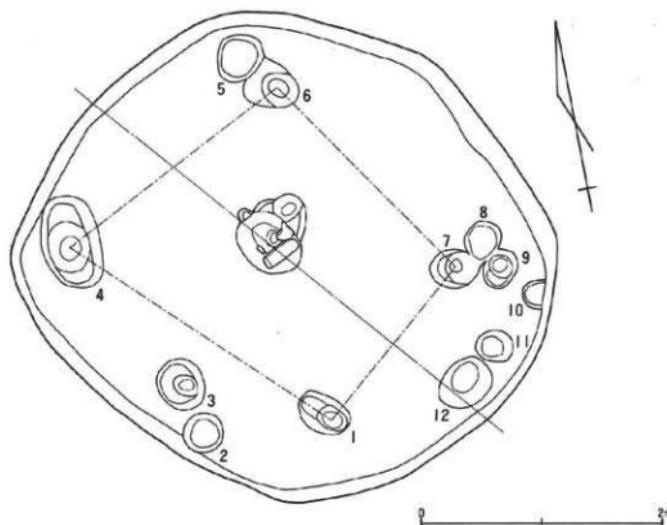
(3) 浜松市遺跡調査会 1983年調査時検出

(4) 関塚英一他「井の頭池遺跡群B地点発掘調査報告」(三鷹市埋蔵文化財報告第6集)三鷹市遺跡調査会 1981

山村貴輝他「三鷹市立第五中学校遺跡」(三鷹市埋蔵文化財報告第8集)三鷹市遺跡調査会 1983

この他堅穴住居跡の特徴について述べている報告書は、時期的に若干新しい住居跡を対象としているが、

八橋一郎・岩崎卓也他「貝の花見塚」(松戸市文化財調査報告書第4冊) 1973



第26図 SB 01 Pit 配置図

Pit No.	径 (長×短cm)	深さ (cm)	Pit No.	径 (長×短cm)	深さ (cm)
1	28 × 27	54	7	38 × 33	47
2	33 × 33	23	8	30 × 29	5
3	43 × 38	19	9	33 × 26	18
4	42 × 34	42	10	24 × 18	14
5	39 × 36	4	11	30 × 27	21
6	45 × 38	34	12	48 × 38	16

第1表 SB 01 Pit 計測表

柿沼幹夫他「上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告 I 前島・島之上・出口・芝山」(埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集) 1977 等がある。

- (5) 赤山容造他「三原田遺跡第1巻住居編」1980において、住居跡を土器型式に対比させる形で型式設定した「住居型式」をさらに発展させ（一遺跡を検討することから地域という面積幅を持たせること）ることにより表出する特徴をさす。

### 3 出土土器について

今回の調査で出土した土器は、おおむね P21 に示した分類に属されると思われることは、IV・2・1 で表記したとおりである。したがってここでは出土土器の編年的位置付けについて再度整理することに目的がある。<sup>(1)</sup>しかし土器編年の併行関係において問題が一つある。それは、袋井市大畑遺跡報告文中において設定された大畑 C 2 式土器の編年位置付けである。

この大畑遺跡の報告文中では、E 5 住居跡出土土器の共伴関係から、落沢式（広義の勝坂 I 式）に併行する土器として大畑 C 2 式が設定されている。大畑 C 2 式の特徴は、a 類：口唇部直下に半截竹管による連続爪形文が施され、薄手で焼成も良好であり、胎土に砂、石英、赤色粒子を含み、I 系統（長野県～関東地方に分布する土器）と一見して異なる特徴をもった土器。b 類：a 類と同じく半截竹管文を主文様とするが、口唇部の爪形文がないもの、地文に繩文を施したものなどを本類とした。c 類：縄文を多用する土器を本類とした（以上報文中より抜粋）である。

今回の中原遺跡の調査では S B 01 及び遺構外から大畑 C 2 式土器の胎土・文様・施文法に共通した土器が出土している（挿図第15図 1～11・14、挿図第18・19図 100～133）。これらは全て破片である為に個々において疑問のもたれるものも含まれるかと思われるが、大畑 C 2 式土器と呼んでさしつかえないものと考える。

ここで問題となるのは、S B 01 から出土の大畑 C 2 式土器である。S B 01 から出土した土器は、IV・2・1 で表記したように勝坂 II 式土器と船元 III 式土器と共に共伴する形で出土しており、大畑遺跡 E 5 住居跡の共伴関係とは、共伴のあり方を異にしている。S B 01 から出土の勝坂式土器（挿図第15図15～25）は、15・16において緻密に連続する角押文・三角押文が施文されており若干古手の様相を示しているが、他の土器はキャタピラ文のあり方・キャタピラ文縁取りの波状沈線文のあり方等において勝坂 II 式土器と断定してよいものである。S B 01 からの土器の出土状態を観ても共伴状況を示しており、今回 S B 01 から出土した大畑 C 2 式土器群は勝坂 II 式併行期のものとして位置付けられるものと考えられている。

ところで、大畑遺跡出土の大畑 C 2 式土器群と中原遺跡出土の大畑 C 2 式土器群とを比較してみる（比較する土器の多くが破片である為に不明確な点が多いと思われるが）と次のようなことが言えるのではないか。1. 口唇部直下の連続爪形文の間隔幅が大畑遺跡のものよりも中原遺跡 S B 01 の方が広い。2. ヘラ状工具または半截竹管状工具による沈線文・平行沈線文の施文状況は、大畑遺跡のものより中原遺跡 S B 01 の方が粗雑である。3. 脚部貼付の前垂れは、中原遺跡 S B 01 の方が厚く一層重なる状況にある。4. 3. の前垂れ部に施文された平行沈線は、大畑遺跡では短く、中原遺跡 S B 01 では長く伸び平行沈線として表現されている。以上は、主に施文状況における変化であるが、時代が下るに従い施文が簡略化・粗雑化するという考え方の上に立ちこの変化を眺めるならば、やはり大畑遺跡出土の大畑 C 2 式土器群の方が古く、中原遺跡 S B 01 出土の大畑 C 2 式土器群の方が新しいということになる。

次に他遺跡出土の大畑 C 2 式土器の共伴関係をとらえてみたい。と言っても遺構内において共伴関係を示した例は大畑遺跡 E 5 住居跡、中原遺跡 S B 01 のみであり、他は包含層出土のものばかりである。県内では長泉町西願寺遺跡 A 地区出土の薄手土器の一部があげられるが、これらと同時に報告されている土器は多くが勝坂 II 式土器である。浜松市半田山 III 遺跡出土土器については、出土遺物が非常に少なく即断できない状況である。県外では、愛知県南知田町清水ノ上貝塚第三群第2類 C 土器<sup>(3)</sup>群に見られるがここでは中期前集土器の出土が多いのに注目される。岐阜県美濃加茂市牧野・小山遺跡<sup>(4)</sup>では、島崎 I 式・II 式土器と呼称するものに含まれており、それぞれ船元 II 式・III 式土器と併行関

係に扱われている。岐阜県南濃町庭田貝塚において出土しているものは若干古く中期前葉土器と共に報告されている。以上確認した類例は少ないが、大烟C 2式土器の編年的位置付についてまとめると縄文時代中期前葉後半から中葉前半部に位置する土器群であることが予測されるものである。

以上の結果をふまえて、今回の発掘調査によって出土した土器群の編年的位置付けを整理してこの項のまとめとする。

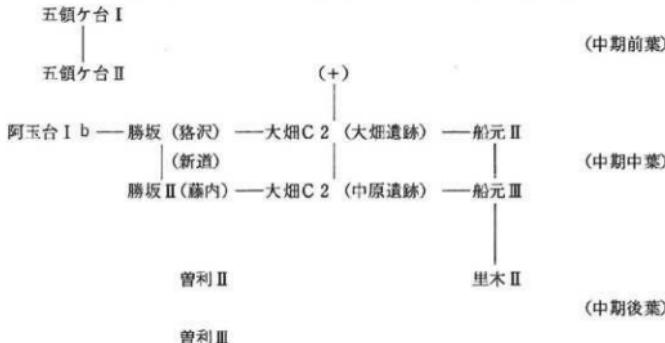
(中原遺跡出土土器の編年的位置付け)

(関東・中部)

(東海)

(関西・瀬戸内)

(中期前葉)



(註・参考文献)

- (1) 市原寿文他『袋井市大烟遺跡——1981年の発掘調査概報——』袋井市教育委員会 1982  
報文中設定の大烟C 2式土器とはあくまで大烟遺跡出土遺物における仮称型式名であることは報文内容からも明らかなことである。ここで確認した大烟C 2式とは確実に時間幅をもった東海地方を中心として分布する土器である。したがって今後資料の増加を待つて仮称でない正式の型式名称を求める必要があると考える。
- (2) 平林将信他『西願寺遺跡(A地区)・長久保城址(二の丸)』静岡県教育委員会・長泉町 1978
- (3) 畿部幸男他『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会 1976
- (4) 増子康眞他『牧野小山遺跡』岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会 1973
- (5) 大參義一他『岐阜県史』通史編原始 岐阜県 1972



図 版





中原遺跡遠景（航空写真）



中原遺跡近景（調査前）





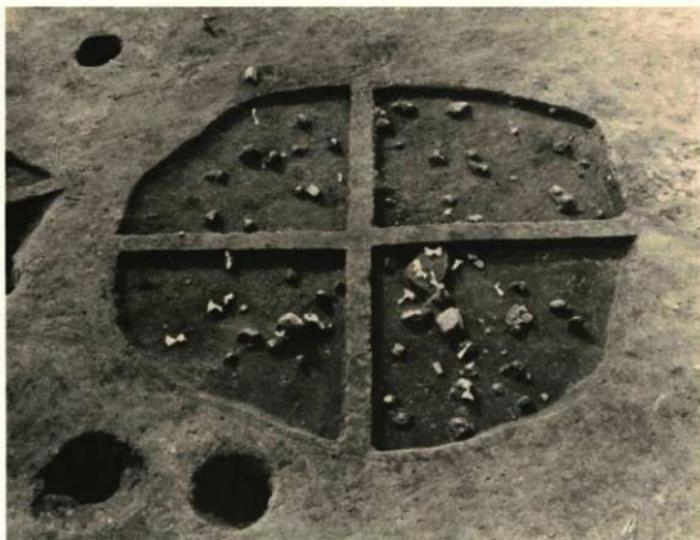
調査区完掘状況（東から）



調査区完掘状況（西から）



図版  
III



SB01 遺物出土状況（北から）



SB01 完掘状況（西から）





SB01 炉跡（西から）



SF01 完掘状況  
(北から)



SF02 完掘状況  
(西から)





SF03-04 遺物出土状況  
(北から)



SF05 完掘状況  
(東から)



SF06 完掘状況  
(北から)





SF07 完掘状況（東から）



SP04 遺物出土状況  
(東から)



SP05・06 完掘状況  
(東から)





SX01 完掘状況（北から）



SX07 完掘状況（東から）



SD01 完掘状況  
(南から)





SB01出土土器  
(1~25)

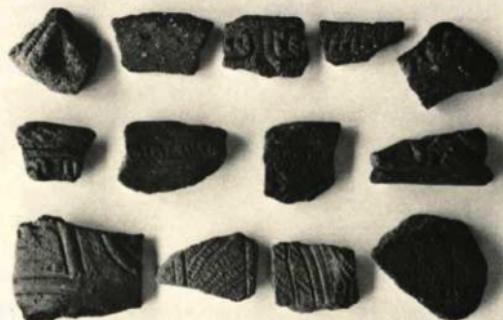


遺構出土土器  
(26~40)



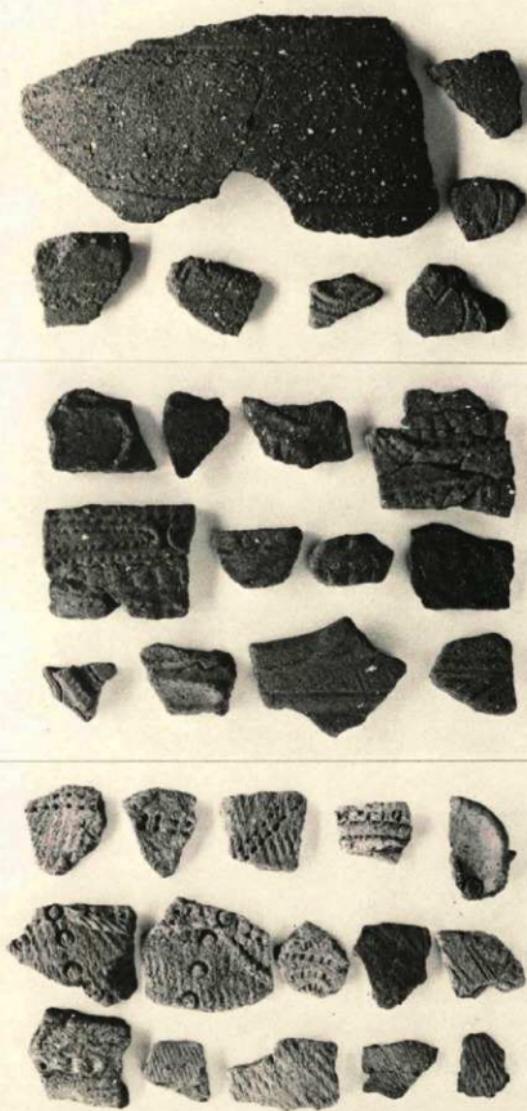


遺構出土土器  
(26~40)



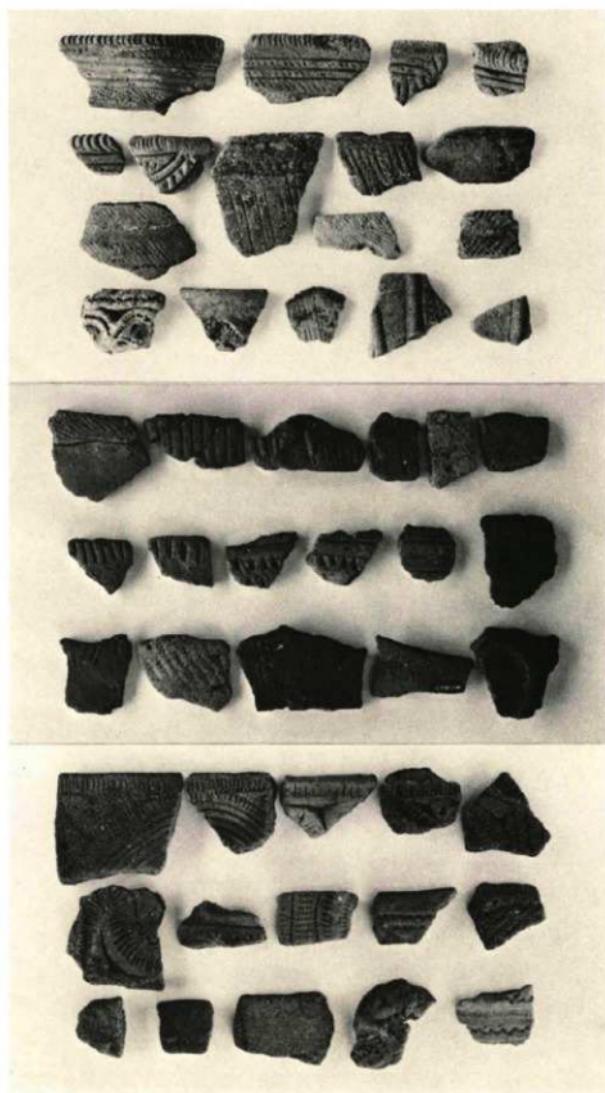
遺構外出土土器  
(41~65)





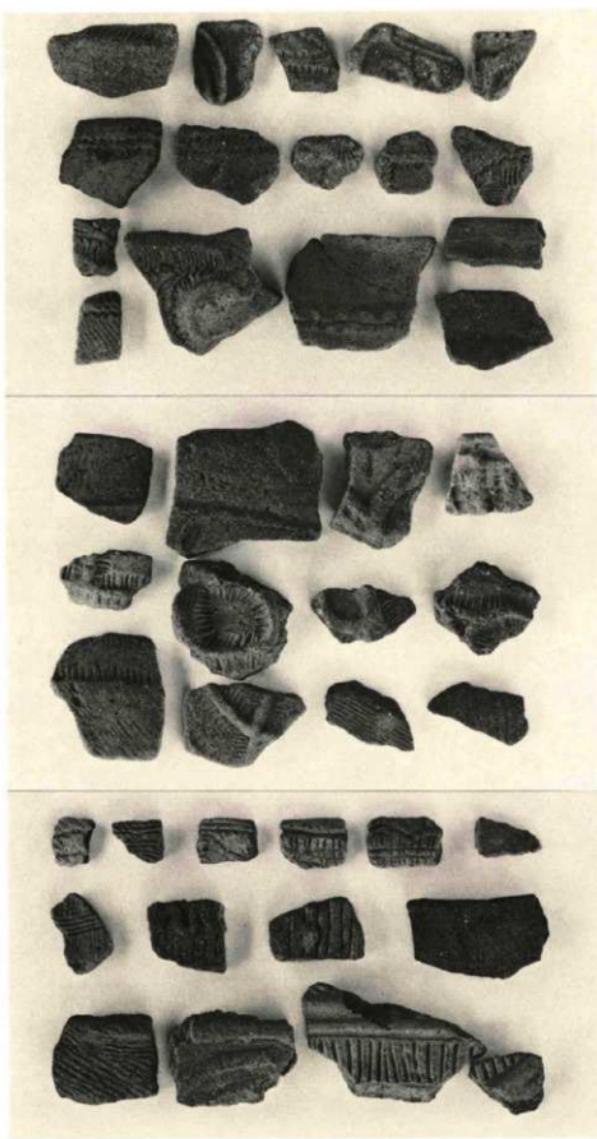
遺構外出土土器  
(66~99)





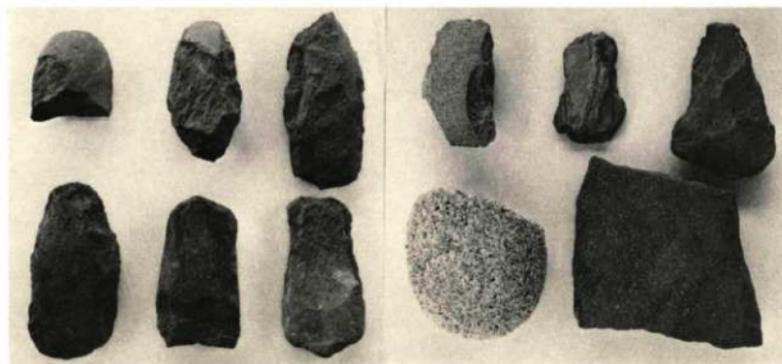
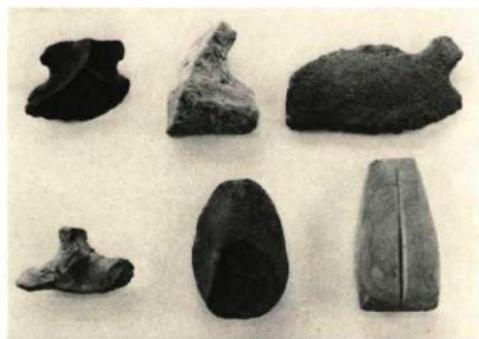
遺構外出土土器  
(100~148)





遺構外出土土器  
(145~190)





出土石器



## 中原遺跡

発掘調査報告書

昭和59年3月30日

掛川市教育委員会  
編集発行  
掛川市掛川1144の1  
TEL (05372)2-2111

株式会社 三創  
印 刷 所  
静岡市豊田3丁目5番30号  
TEL (0542)82-4031







